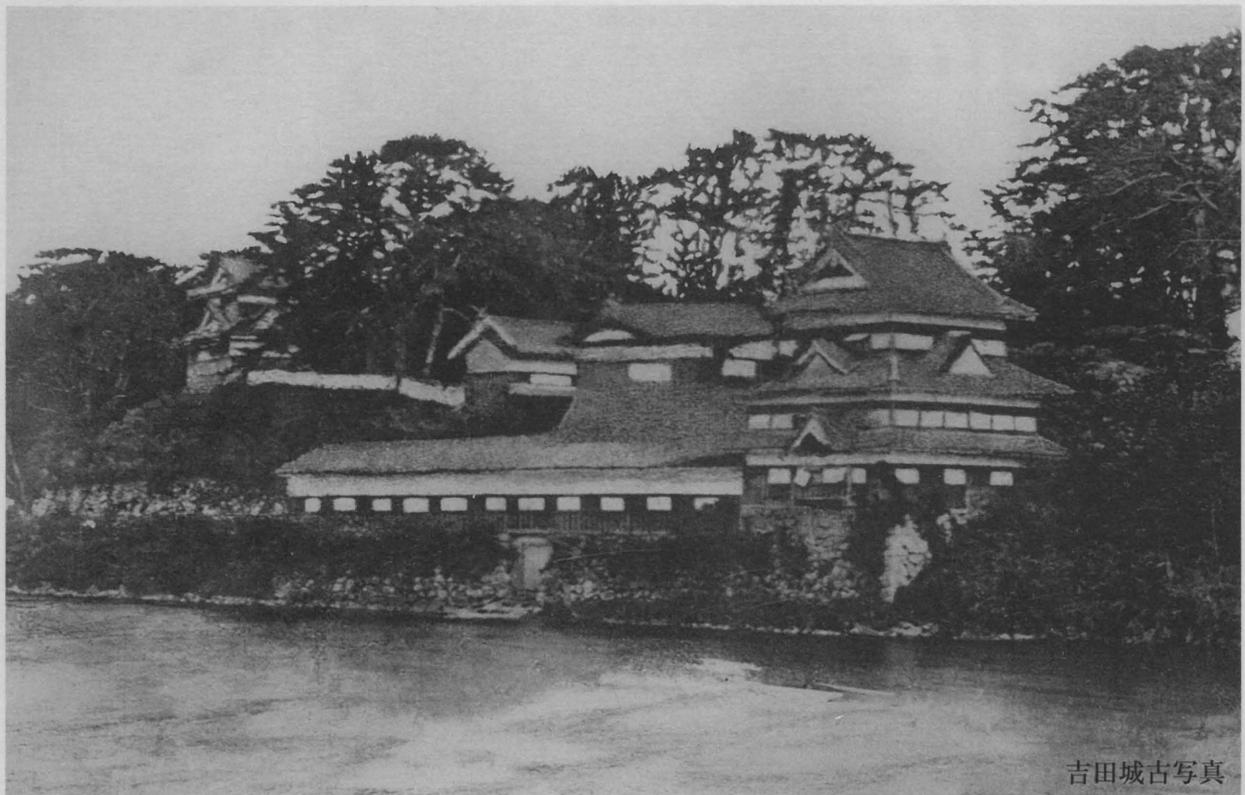


吉田城址 (IV)



2000年12月

豊橋市教育委員会

よ し だ じょう し
吉 田 城 址 (IV)

2000年12月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、豊橋市今橋町4番地において豊橋市陸上競技場便所新築工事に伴い事前に実施された吉田城址18次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査期間は平成12年5月15日～同年5月26日で、調査面積は70m²である。
2. 発掘調査は、豊橋市教育委員会教育部美術博物館が行い、岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）が調査を担当した。
3. 発掘作業については、地元の方々のご協力を得た。また、報告書作成にあたり、遺構・遺物の実測・トレース等については鳥居節子・山本絢子・磯村愛子・平賀静子・樋口緑子・村田陽子らの援助を受けた。写真撮影は岩瀬が行った。
4. 本書の執筆に際し、陶磁器については藤澤良祐・青木修（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）、吉田藩について増山真一郎（豊橋市二川宿本陣資料館学芸員）、高橋洋充（豊橋市美術博物館学芸員）の各氏からご教示を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本書の執筆・編集は岩瀬が行った。
6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位は、この座標に沿うものである。なお座標設置については（株）イビソクのご協力を得た。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラーライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 2
- 3. 吉田城の歴史と構造 3
- 4. 歩兵第十八聯隊の歴史と聯隊陣地構造 5

第2章 調査の経過

- 1. 調査に至る経過 7
- 2. 調査の方法 7

第3章 遺構

- 1. 掘立柱建物 10
- 2. 石垣 10
- 3. 塀 11
- 4. 溝 13
- 5. 土壇 13
- 6. 歩兵第十八聯隊関連遺構 15

第4章 遺物 18

第5章 まとめ

- 1. 倉垣源左衛門邸出土時期の組成について 29
- 2. まとめ 32

報告書抄録 34

挿 図 目 次

第1図	吉田城址周辺地形図 (1/40,000)	1
第2図	吉田城址周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	近世吉田城の構造 (1/10,000)	4
第4図	歩兵第十八聯隊兵舎等配置図 (1/2,500)	6
第5図	調査区位置図 (1/2,500)	8
第6図	調査区全体図 (1/80)	9
第7図	遺構実測図-1 (1/40)	16
第8図	遺構実測図-2 (1/60)	17
第9図	出土遺物実測図-1 (1/3)	23
第10図	出土遺物実測図-2 (1/3)	24
第11図	出土遺物実測図-3 (1/3)	25
第12図	出土遺物実測図-4 (1/3)	26
第13図	倉垣邸出土陶磁器用途産地別組成	31

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	27
-----	---------------	----

写真図版目次

図版 1-1	吉田城址上空写真	2	歩兵第十八聯隊航空写真-大正13年撮影- (北から)
2-1	吉田城址本丸 (北から)	2	調査区遠景 (北西から)
3-1	調査区全景 (南から)	2	調査区全景 (北から)
4-1	SA-1~3 (南から)	2	SA-1~3 (北から)
3	SA-1・2 P1 (西から)	4	SA-1・2 P2 (東から)
5-1	SA-1・2 P3 (東から)	2	SA-1・2 P9・P10 (東から)
3	SA-1 P10とSA-2 P9の切り合い (東から)	4	SK-4 (東から)
5	SB-1 (南から)		
6-1	石垣 (北西から)	2	石垣 (北から)
3	石積みの様子 (西から)	4	石垣埋没状況 (南から)
7-1	SK-6~9 (南から)	2	SK-6~9 (北から)
3	SK-6~9A-A'ライン断面 (北から)	4	SK-6~9B-B'ライン断面 (北から)
8-1	調査区東壁断面 (西から)	2	歩兵第十八聯隊関連遺構-1 (西から)
3	歩兵第十八聯隊関連遺構-2 (西から)	4	歩兵第十八聯隊関連遺構-3 (東から)
5	調査の様子		
9	出土遺物-1		
10	出土遺物-2		

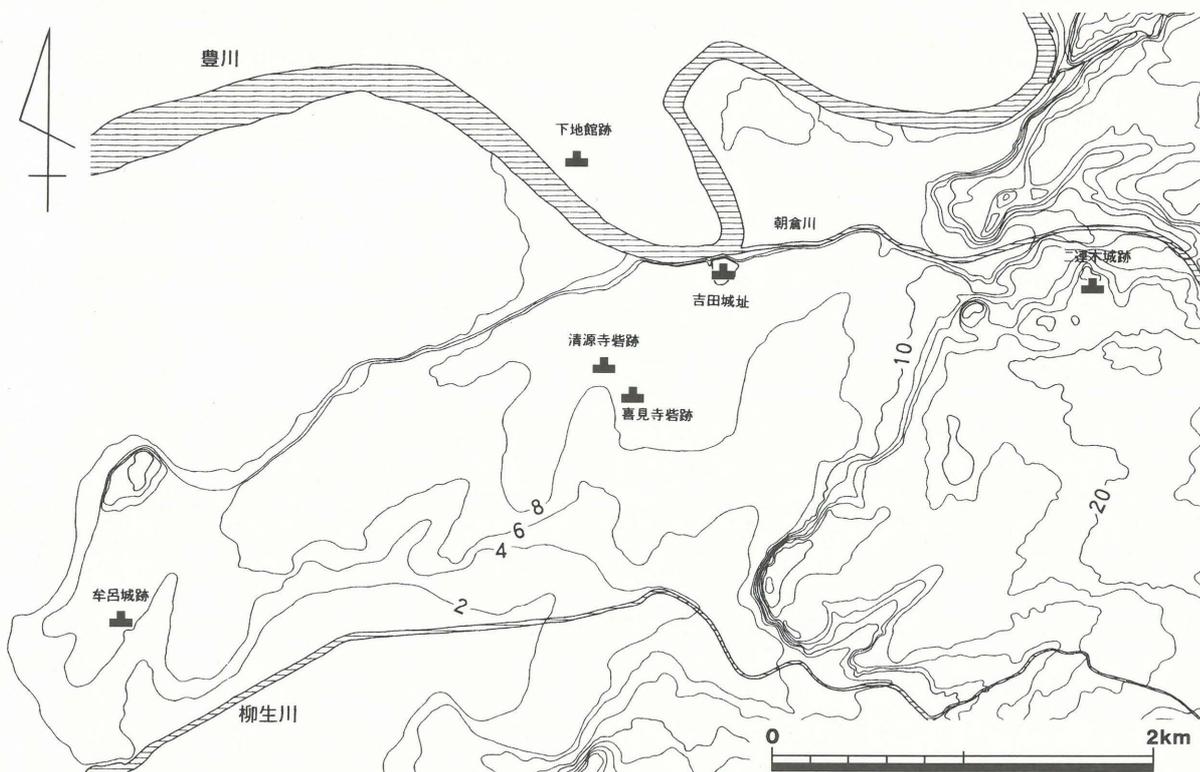
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

吉田城址は、豊橋市今橋町を中心に所在する城郭址である。近世には吉田藩主の居城となり、代々譜代大名が配置されていた。この吉田城址は、城郭以外にも縄文時代から近代までの遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。

豊橋市は、市域が東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾、北を豊川によってそれぞれ限られている。東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、大きくは高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の3面に分けることができる。

吉田城址は河岸段丘上にあり、前述した3面のうち低位面に立地している。この低位面は、他の段丘面に比べて形成年代が新しいため侵食は進んでおらず、その上面は比較的平坦となっている。城は、この低位面のうち、周囲よりも1～2m程高く小山状になった、豊川・朝倉川に浸食された段丘崖の縁辺を中心に築城されている。この地は標高10m前後で、北面する沖積地との比高差は7～8mを測る。このように吉田城址は平城に分類されるが、段丘崖を中心とした立地のため、城下や街道などの周囲を広く見渡すことのできる場所に在ると言える。またすぐ北側は、豊川・朝倉川に区切られるというような天然の要害地に築城されている。この場所は、洪水等に関する災害や水利・交通などの利便性を考慮すると、城郭の立地としては適した場所であると言えよう。



第1図 吉田城址周辺地形図 (1/40,000)

2. 歴史的環境 (第2～4図)

吉田城址が立地する河岸段丘やその北側に広がる沖積低地には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。ここでは、吉田城址を中心に周辺の遺跡の概要について時代別に述べ、また吉田城の概要、更にはその後に設置された歩兵第十八聯隊について記すことにする。

A. 周辺の遺跡 (第2図)

縄文時代のものは、吉田城址と同じ段丘上に石塚貝塚(14)があり、北方の沖積地に五貫森貝塚(2)、大蚊里貝塚(3)などがある。石塚貝塚は、ハイガイを主体とする前期中葉の貝塚で、東三河最古の貝塚である。貝層は厚さ30cm程で、前期中葉の縄文土器等が出土している。五貫森貝塚や大蚊里貝塚は、自然堤防上に形成されたヤマトシジミを主体とする晩期の貝塚である。その他には眼鏡下池北遺跡(20)・洗嶋遺跡(25)・おいほて遺跡(27)等で早期や中期の土器が少量だが出土している。

弥生時代のものは、飽海遺跡(17)、西側遺跡(24)、塩田遺跡(8)、緑遺跡(13)などがある。飽海遺跡は吉田城藩士屋敷内から発見された後期の遺跡であるが、調査は行われておらず詳細は不明である。蛇行する豊川を挟んだ吉田城址の対岸には、弥生土器が出土した緑遺跡が所在する。西側遺跡は、中期から後期の貝塚に伴う遺跡で、堅穴住居と考えられる遺構が確認され、比較的大きな集落と推測されている。

古墳時代のものは、集落址では熊野遺跡(19)で前期の堅穴住居が2軒、東田遺跡(32)では後期の堅穴住居が2軒見つかっている。古墳では東田古墳(29)や稲荷山古墳群(18)などがある。東田古墳は中期の前方後円墳で全長40mを測り、後円部から烏文鏡・大刀が、墳丘からは円筒・形象埴輪が出土している。稲荷山古墳群は、方墳を主体とした初期群集墳と考えられるものである。なお、過去の吉田城址の調査では、銅鏃・円筒埴輪等の遺物が出土したり、後期の堅穴住居が検出されており、城域内に古墳や集落の存在していた可能性が考えられる。

古代のものは、この時期の単純遺跡は見つかっていない。しかし、吉田城址内からは当該期の須恵器、土師器、灰釉陶器等の遺物が広範囲から出土している。この付近は、伊勢神宮領の飽海神戸・吉田御園があったとされ、また前回の17次調査区では柱穴の掘り方が方形の官衙的性格の高い総柱建物が検出されている。

中世のものは、熊野遺跡、東側遺跡(23)、西側遺跡などの台地上で小規模な集落跡が見つかっている。なお宮井戸遺跡(4)、袋小路遺跡(5)などの沖積地に立地する遺跡からも、中世陶器や土師器が散布しており、集落が存在していた可能性は高い。中世城館では、戸田氏の築いた二連木城址(31)が台地縁辺部の現大口公園にあり、土塁、堀などが残っている。また、松平家康が吉田城攻めの際に築いたとされる喜見寺砦址(16)、清源寺砦址(15)などもあるが、市街地にあるため土塁等の遺構は消滅している。



- | | | | |
|---------|------------|-----------|------------|
| 1 吉田城址 | 2 五貫森貝塚 | 3 大蚊里貝塚 | 4 宮井戸遺跡 |
| 5 袋小路遺跡 | 6 ごんぞうぼう古墳 | 6 下河原遺跡 | 8 塩田遺跡 |
| 9 善蔵遺跡 | 10 為河原郷遺跡 | 11 北川原遺跡 | 12 下地館址 |
| 13 緑遺跡 | 14 石塚貝塚 | 15 清源寺砦址 | 16 喜見寺砦址 |
| 17 飽海遺跡 | 18 稲荷山古墳群 | 19 熊野遺跡 | 20 眼鏡下池北遺跡 |
| 21 中郷遺跡 | 22 中郷西遺跡 | 23 東側遺跡 | 24 西側遺跡 |
| 25 洗嶋遺跡 | 26 牛川焼窯跡 | 27 おいほて遺跡 | 28 南牛川A遺跡 |
| 29 東田古墳 | 30 東郷遺跡 | 31 二連木城址 | 32 東田遺跡 |

第2図 吉田城址周辺遺跡分布図 (1/25,000)

B. 吉田城の歴史と構造 (第3図)

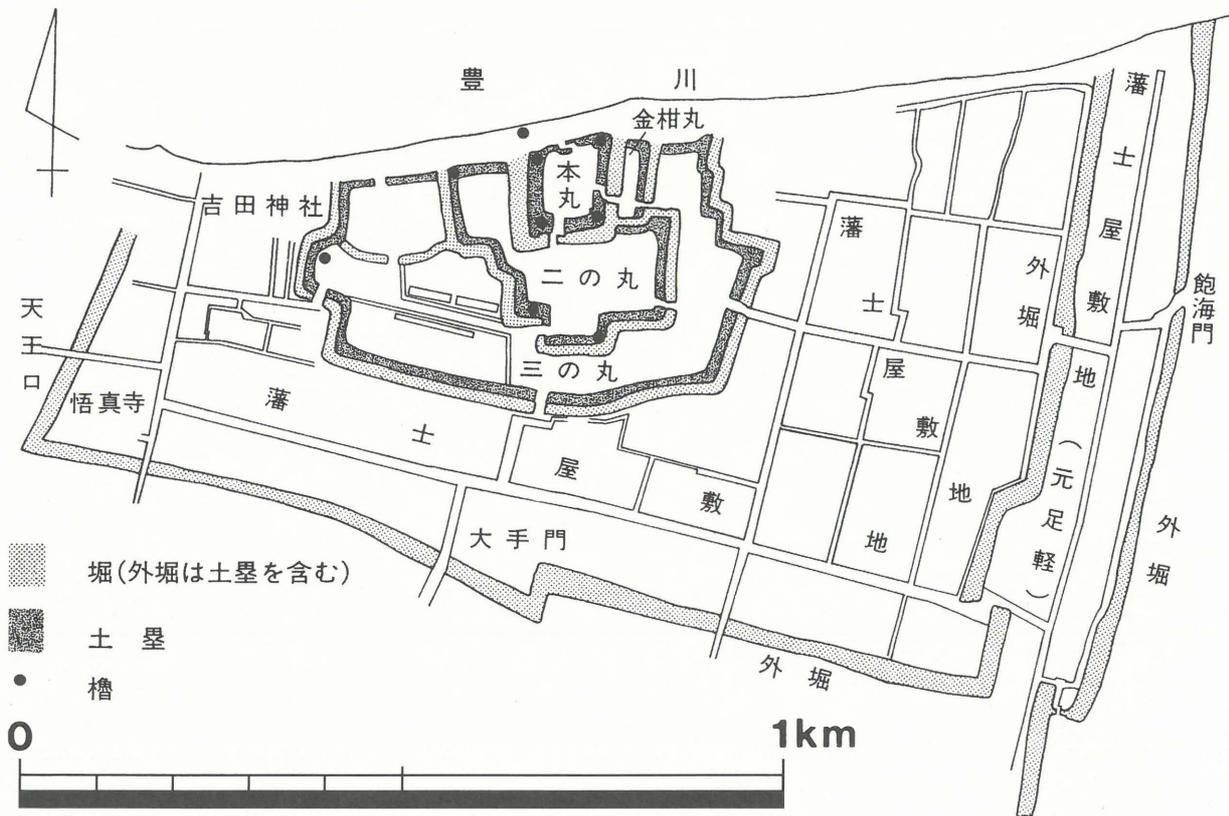
吉田城は、今川氏親の指示により牧野古白によって永正2 (1505) 年に築かれたとされる城である。当初は今橋城と称していたが、大永2 (1522) 年に牧野伝蔵信成によって今橋は吉田に改められた。この地は、牧野氏・戸田氏・西郷氏・本多氏等の戦国武将が向かい合っており、16世紀はじめには戸田氏や牧野氏、西三河の松平氏による吉田城の争奪戦が繰り返された。その後は駿河の今川義元の領

有下となり、やがて徳川家康が三河を統一すると徳川側の家臣酒井忠次が入城した。酒井忠次は城下の整備に力を入れている。文献上に記述はないが、吉田城址9次調査では16世紀中葉に掘削されたと考えられる堀が2条検出されており、この時期の城域拡張が推測される。

家康の関東移封後は、豊臣秀吉家臣の池田照政（後に輝政と改名）が城主となり、城域の拡張・整備、城下町の整備などを進めた。照政の吉田城整備はかつてないほどの大工事であり東西1,400m、南北600mに及んだが、工事未完成のまま姫路に転封している。その後は、譜代大名が入封したが、小禄のため城の維持に苦慮したと言われ、大規模な改修は行われていない。

吉田城の構造は、戦国時代は記録が乏しく詳細はわかっていないが、江戸時代の構造は現存する絵図「吉田藩士屋敷図」や地籍図等から復元することができる。縄張りについては、池田照政時代のものをほぼ踏襲していると言われており、背後の豊川を自然の要害とし、本丸を中心にして、二の丸、三の丸、藩士屋敷が取り囲む「半輪郭式」の構造をとる。また、本丸の北側には腰曲輪を置き、背後の攻撃に備えている。本丸は、東西約60m、南北約70mの規模で、内側を石垣で囲んでいる。なお、本丸の東側には金柑丸と呼ばれる曲輪があるが、中途半端な構造でその用途ははっきりしない。だが、ここが今橋城時代の本丸址との説もある。城内の石垣については、本丸周辺、門、水門、二の丸の堀の一部などに用いられたのみである。

今回の発掘調査地を、幕末に描かれた吉田藩士屋敷図及び地籍図等で当てはめてみると、吉田藩の中老、石高230石の倉垣源左衛門屋敷地と八幡小路が含まれることがわかる。幕末時の吉田藩士屋敷



第3図 近世吉田城の構造 (1/10,000)

の配置は、三の丸門周辺には家老西村邸などの藩最高位の屋敷が配置され、川毛門より延びる川毛通沿いにも中老などの上級藩士の屋敷が建ち並んでいる。倉垣邸は、川毛通と八幡小路の交差する南東角地に位置し、南北約65m、東西約45m、面積約3,000㎡の大きな邸宅である。表門は北向きで、城に向かう主要道の川毛通に面している。塀が長い八幡小路側には門の記載がないが、通用口などは存在していた可能性は考えられる。しかし、屋敷地内の構造については描かれた図面等が残っていないため、詳細は不明である。

C. 歩兵第十八聯隊の歴史と聯隊陣地構造（第4図）

明治になると吉田城は取り壊され、櫓等は解体された。その後、名古屋鎮台に設置された歩兵第十八聯隊の拠点として、陸軍省が吉田城内に兵舎の建設を行った。明治18年の兵舎完成とともに名古屋から聯隊が移動し、ここに豊橋歩兵第十八聯隊が誕生した。

さて、歩兵第十八聯隊であるが、ここでは戦歴を中心に見よう。明治27年の日清戦争が始まると、十八聯隊は朝鮮半島の元山に上陸し、平壤を陥落させ清国の海城・鞍山で激戦し帰還した。明治37年の日露戦争では、遼東半島に上陸した十八聯隊は、南山を攻めた後に北進し、遼陽・奉天へと転戦した。やがてロシアから共産主義のソ連に国が替わると、大正10年には防共及び大陸進出をねらい第一次北満派遣が行われ、満州事変後は満州国の治安維持のため第二次北満派遣が行われている。そして、日中戦争が始まると十八聯隊は、昭和12年に上海で激しい戦闘を行い、敗走する中国軍を追い首都南京に入城する。昭和13年の漢口攻略戦に参戦した後は、主に漢口北方の警備にあっていた。しかし、太平洋戦争が勃発すると、十八聯隊は香港攻撃の準備として長沙作戦等に参加し中国内を転戦していたが、昭和17年からは関東軍の配下になり昭和19年まで満州国海城に駐屯する。しかし戦局の悪化から、十八聯隊は中国大陆を離れマリアナ諸島へ移動することになる。ここで米軍と戦うことになるが、豊富な物量による圧倒的な兵力の差から、十八聯隊はサイパン島・グアム島の戦闘で玉砕し消滅した。

満州事変後、十八聯隊は長期的に転戦していたため、豊橋の兵舎では十八聯隊補充隊や歩兵第二二九聯隊などが編成されたが、昭和16年以降は中部第六二部隊と改称され、昭和18年には替わって中部一〇〇部隊が新設されて終戦を迎えている。

さて、明治18年に完成した、この十八聯隊の兵舎建設によって吉田城は大きく改変されている。第4図は、十八聯隊の兵舎配置図である。これを見るとわかるように、二の丸の土塁及び堀は一部を残して壊され、平坦地を作っている。三の丸より内郭については、土塁や堀などは旧城の形態をそのまま利用しているが、通用門等の位置は変更され作り替えられている。主要建物の配置は、旧三の丸口門の正面左に聯隊本部を置き、二の丸・三の丸部分には、左側に兵舎などの居住空間を、右側には倉庫や集会所などが設けられた。中心となる本丸には、被服庫が3棟建つのみであった。一方、総堀内の藩士屋敷地は取り壊され、南側及び西側は宅地となり官公庁や民家が建ち並んだが、東側は更地となり練兵場として兵士の訓練場所として利用された。今回の調査地も練兵場内に位置し、建造物のない部分に相当している。



第4図 歩兵第十八聯隊舎等配置図 (1/2,500)

参考文献

豊橋市教育委員会他 1994 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址 (I)』
 豊橋市教育委員会他 1995 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第24集 吉田城址 (II)』
 豊橋市教育委員会他 1999 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集 吉田城址 (III)』

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

吉田城址は、豊橋市教育委員会をはじめとして愛知県教育委員会や（財）愛知県埋蔵文化財センターによって、これまでに17次に及ぶ発掘調査が行われている。今回の発掘調査は、吉田城址の18次調査に相当する。調査は、豊橋市陸上競技場の正面スタンド外側に便所を新築するために行われた。調査に至るまでの経過は以下の通りである。

平成11年10月に豊橋市教育委員会スポーツ課から、陸上競技場利用者や豊橋公園利用者の便宜を図るために競技場外に便所を平成12年9月に建てる予定があり、建設予定地内に埋蔵文化財が存在するのかという照会があった。埋蔵文化財保護部門である美術博物館では、便所建設予定地が吉田城藩士屋敷地の一部に相当し、現地には構造物がないため遺構は良好に遺存しているものと判断し、建設前に発掘調査が必要である旨を回答した。平成11年10月20日に発掘調査費用の見積依頼書がスポーツ課から提出されたため、美術博物館では調査金額を提示した。

平成12年度に陸上競技場便所建設費が予算化されたため、平成12年4月にスポーツ課から発掘調査施行依頼書が提出された。それによると、秋のスポーツ大会に間に合わせるため便所工事着手を6月には行いたいとのことで、着手時期が約3ヶ月間早まった。美術博物館とスポーツ課との協議の結果、竣工時期に配慮して、発掘調査開始時期を繰り上げ、5月中に調査に着手し、便所建築部分の50㎡に周辺の掘削幅部分約20㎡を含めた、合計70㎡について発掘調査を実施することで合意した。平成12年5月10日の工事着手前に、スポーツ課より文化財保護法第57条の3「埋蔵文化財発掘の通知」が県教育委員会宛にあり、これを基に美術博物館では5月15日から吉田城址の発掘調査に着手した。

2. 調査の方法（第5図）

調査は、便所建築予定地の14m×5m程度の範囲と狭かった（第5図）。集落址などの通常調査の場合、豊橋市教育委員会では10m四方のグリッドを設定して調査を行っている。このため、今回の調査でも調査区に合わせて一辺10mのグリッドを設定し、各グリッドを北からA-1区、B-1区としてそれぞれ任意で設定した。調査区内の国土座標については、座標を後から示すという方法を行った。

調査区の基本層序は、表土下約10cmのところには歩兵第十八聯隊時代の旧地表面があり、その下約10cmぐらいのところには吉田城藩士屋敷時代の旧地表面が存在していた。地山面は黄褐色粘土層であり、遺構検出はその地山面で実施している。なお、作業順序は以下のとおりである。

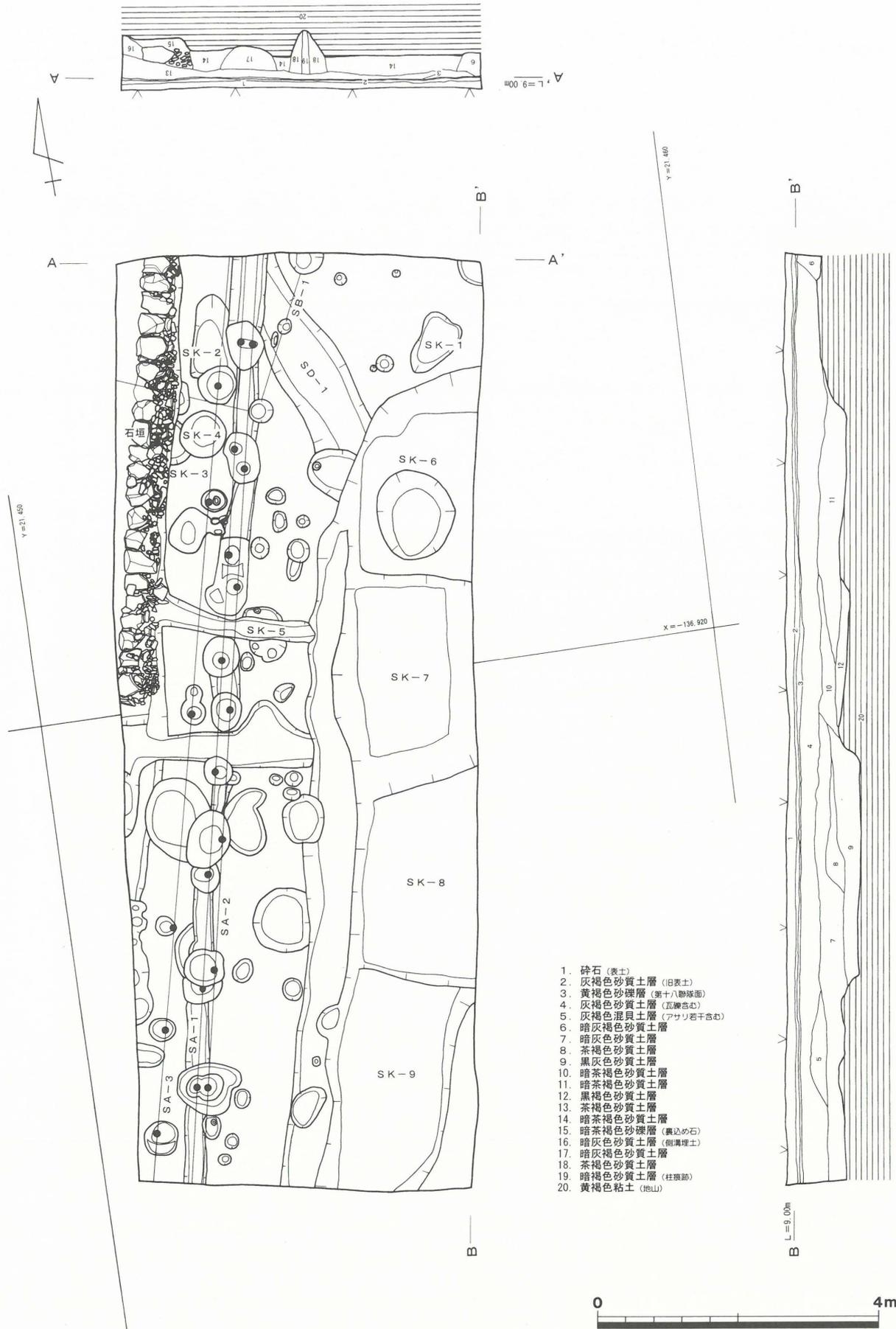
1. 重機を使用して表土剥ぎを行う。
2. 調査区グリッドを設定し、国土座標に照合させる。
3. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。

4. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、遺構写真を撮影する。
5. 遺構を完掘させ、遺構全体図を完成させる。
6. 調査区内の清掃を行い、全体写真を撮影する。
7. 調査終了後、重機を使って調査区を埋め戻す。

今回の調査では、表土剥ぎの段階で石が一行に並んでいるのが確認できた。当初は、歩兵第十八聯隊時代の遺構かと考えたが、堆積土層及び出土遺物からこの石列が江戸時代の藩士屋敷石垣であることがわかった。また根石と思われる集石が2箇所見つかかり、これらは藩士屋敷の基礎かと思っただが、堆積土層及び出土遺物から歩兵第十八聯隊以降のものであることがわかっている。

また予想に反して古代～中世の遺構・遺物が少なく、若干土壌が検出されたにすぎなかった。遺物では古代の須恵器等が中世以降の土壌や表土から出ており、吉田城築城時や廃城時の土木工事により、かなりの遺構が壊されている可能性が考えられる。





第6図 調査区全体図 (1/80)

第3章 遺構

遺構は、掘立柱建物（SB）1棟、石垣1箇所、塀（SA）3列、溝（SD）2条、土壙多数等が検出されている。ここでは各遺構を種類ごとに説明し、土壙に関しては遺物を出土したもののみを記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値であり、掘立柱建物、塀の規模計測値は柱穴の中心間の測定値である。

1. 掘立柱建物（第7図）

掘立柱建物は、側柱のものが1棟確認されている。この他に、柱痕跡のある柱穴や柱穴状の土壙は、塀以外には検出されていない。

SB-1（第7図）

2間以上×1間以上の掘立柱建物で、大半は調査区外に延びている。主軸方位はN-21°-Eを測る。規模は、桁行2.36m以上、梁間2.06m以上をそれぞれ測り、柱間は桁行でP1～P2が0.98m、P2～P3が1.26m、梁間でP3～P4が1.14mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は一部を調査区外に欠くが平面形はほぼ円形と思われ、中央に柱痕跡が確認されている。柱穴の直径は50cm、深さは28cmで埋土は茶褐色砂質土、柱痕跡は径14cmの円形で埋土は暗灰褐色砂質土である。P2は最大径21cmの楕円形で深さは18cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P3は円形で直径36cm、深さ19cmを測り、埋土は茶褐色砂質土である。P4は大半を石垣で壊されているが最大径44cmの楕円形をなすものと思われ、深さ14cmを測る。柱穴の埋土は、茶褐色砂質土である。各柱穴からは遺物は出土していないが、吉田城藩士屋敷石垣によって柱穴のP4が壊されているため、建物の時期は江戸時代以前、おそらく中世のものと同推測される。

2. 石垣（第7図）

A-1地区西側で見つかった、吉田城藩士屋敷と八幡小路との敷地境にある石垣である。この藩士屋敷は、幕末では吉田藩中老230石の倉内源左衛門が住んでおり、その敷地面積は990坪（約3,267㎡）と広大な屋敷である。

石垣（第7図）

調査で検出されたのは、石垣及びその掘り方である。掘り方は、西側を調査区外で欠くが、断面箱形の溝が南北方向に掘られていたと考えられ、底面は平坦である。検出された規模は長さ9.2m以上、幅0.9m以上、深さは0.5mを測る。石垣は、掘り方底面に約10cmの暗褐色砂礫を敷き、その上に約

20～40cm大の石材を西側の目地を合わせて一列に並べており、石垣の上面と掘り方底面には約20～30cmの高低差がある。石垣の主軸方向はN-9°-Eである。石材と掘り方の間には、約5～10cm大の裏込め石が隙間無く詰められ、石材を固定している。検出された石垣の規模は、長さ6.5m、幅は裏込め石を含めて0.6mであった。途中で歩兵第十八聯隊関連の下水管によって壊されており、それより南側では石垣及び裏込め石は確認されていない。石垣及び掘り方内からは遺物は出土していないが、石垣は天正18年（1590）に池田照政が城主になり城域整備を行った以降のものと思われる。

ところで、石垣は全て一段のみで、更に石が上に積まれていた箇所は無かった。しかし、裏込め石の方が石列より高い面で検出されていることから、江戸時代には2段以上石が積まれていたものと考ええる。明治になって歩兵第十八聯隊がここを練兵場を整備しているため、おそらく整備の際に2段目以上の石は撤去された可能性が高い。また、石垣の前には幅0.4m以上の側溝が存在しており、これが八幡小路の排水用側溝の役割を果たしていたものと思われる。屋敷側とは反対の八幡小路側の掘り方は調査区外で検出されていないため、この側溝の両側が石垣なのか、八幡小路側は素掘りなのかはわからない。側溝からは、須恵器と中世陶器（第11図60～65）が出土しているが、古い遺物が混入したと思われる。

3. 塀（第8図）

塀はSA-1～SA-3の3箇所が見つかった。このうち、塀の建て替えのためSA-1とSA-2は重複しており、柱穴の切り合い関係からSA-1の方が古いことが確認されている。SA-1とSA-2の柱穴については、明確に分離できなかった点もあり、ここでは両者の柱穴については通し番号で記述する。

SA-1（第8図）

SA-1は調査区西側でSA-2と重複して検出され、7間以上で大半は調査区外に延びている。検出した柱穴は8基で、柱穴間は幅0.3～0.5mの布掘り状の浅い溝で連結されている。SA-1の長さは13.4m以上、主軸方位はN-9°-Eを測る。柱間はP1～P2が1.47m、P2～P3が1.53m、P3～P4が1.53m、P4～P6は1.62m、P6～P8が1.47m、P8～P10は1.59m、P10～P11は1.47mを測る。

柱穴の規模及び埋土は、P1はSA-2の柱穴と完全に重複しているため、規模等はSA-2で述べる。P2はSA-2の柱穴と半分ほどが重複しているが、本来は径51cmの円形であったものと思われる。柱穴の深さは63cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P3もSA-2の柱穴と一部が重複しているが、本来は径42cmの角張った円形であったものと思われる。柱穴の深さは45cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P4は円形で直径59cm、深さ45cmを測り、埋土は茶褐色砂質土である。P6は円形で直径42cm、深さは117cmを測る。P8はSA-2の柱穴と一部が重複し、切り合い関係が明確に確認された柱穴である。本来は径42cmの円形で、深さ72cmの柱穴であったものと思われるが、SA-2・P7によって柱穴北側が壊されている。埋土は暗灰褐色砂質土である。P10もSA-2と半分は

どが重複し、切り合い関係が明確に確認された柱穴である。本来は径62cmの円形で、深さ60cmの柱穴であったものと思われるが、SA-2・P9によって柱穴北側が壊されている。埋土は茶褐色砂質土である。P11はSA-2の柱穴とほぼ完全に重複しており、規模等はSA-2で述べる。

各柱穴からの出土遺物は、P3から須恵器・蓋と中世陶器・碗（第9図1・2）が出土しているが、吉田城藩士屋敷石垣と主軸が合っているため堀の帰属時期は石垣と同時期で、古い遺物が混入したものとする。よってSA-1は、石垣同様に池田照政の城域整備以降のものと思われる。

SA-2（第8図）

SA-2はSA-1を建て直したもので、6間以上で大半は調査区外に延びている。検出した柱穴は7基で、柱穴間は幅0.3~0.5mの浅い溝で連結されている。SA-2の長さは13.4m以上、主軸方位はN-9°-Eを測る。柱間はP1~P2が1.83m、P2~P3が1.71m、P3~P5が1.80m、P5~P7は1.89m、P7~P9が1.83m、P9~P11は1.74mを測る。

柱穴の規模及び埋土は、P1はSA-1の柱穴に完全に重複し、平面形は楕円形で規模は最大径72cm、深さは45cmで埋土は暗灰褐色砂質土である。P2はSA-1の柱穴と半分ほどが重複しているが、本来は径45cmの円形であったものと思われる。柱穴の深さは69cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P3もSA-1の柱穴と一部が重複しているが、本来は最大径60cmの楕円形であったものと思われる。柱穴の深さは60cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P5は最大径57cmの楕円形で深さ51cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。P7はSA-1・P8と僅かに重なっており、最大径81cmの楕円形で、深さは81cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。P9はSA-1・P10の柱穴北側を壊し、切り合い関係が明確に確認された柱穴である。最大径57cmの楕円形、深さ60cmの柱穴で、埋土は暗灰褐色砂質土である。P11はSA-1の柱穴とほぼ完全に重複しているものである。平面形は最大径96cmの楕円形で、深さは63cmを測る。P11は深さ33cmの所に段があり、そこから底面へは最大径51cmの双円形に掘られる二段構成になっている。

各柱穴からの出土遺物は、P5から須恵器・盤（第9図3）が、P9からは中世陶器・碗（第9図4）が出土しているが、SA-1同様、これらの遺物は古いものが混入したものとする。SA-2は、池田照政の城域整備以降に建てられたSA-1の建て替えであることから、その帰属時期は江戸時代のものと思われる。

SA-3（第8図）

SA-3はSA-1・2にほぼ平行して検出された柱穴列である。2棟の掘立柱建物の可能性もあるが、ここでは堀と扱う。検出した柱穴は6基で、長さは13.4m以上、主軸方位はN-8°-Eを測る。SA-3の柱間はP1~P2が1.65m、P2~P3が3.06m、P3~P4が3.09m、P4~P5は1.47m、P5~P6が1.50mを測る。柱穴間はP2とP3の間及びP3とP4の間に柱穴がなく、そこだけ間隔が大きく空き、丁度他の柱間の距離を2倍した数値である。このことから、この間に門などの何らかの施設があったことが考えられる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は平面形は円形で、規模は径57cm、深さは45cmで埋土は暗灰褐色砂

質土である。P 2 は最大径39cmの楕円形で、深さは27cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P 3 は2基の柱穴が重なっているが、本来は径36cmの円形であったものと思われる。柱穴の深さは75cm、埋土は暗茶褐色砂質土である。P 4 は径28cmの円形で深さ19cmを測り、埋土は茶褐色砂質土である。P 5 は径39cmの円形で、深さは79cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。P 6 は径54cmの円形で、深さ48cmの柱穴である。検出面より9cmの所に平坦面がある。埋土は暗灰褐色砂質土である。

各柱穴からの出土遺物は、P 3 から陶器・仏飯器（第9図5）が出土しており、その帰属時期は18世紀後葉以降のものと思われるが、SA-1・2との先後関係は不明である。

4. 溝（第6図）

溝は、2条が確認されているが、1条は歩兵第十八聯隊建物に伴う配水管埋設時のものであり、これについては第3章6で述べる。

SD-1（第6図）

調査区の北部で検出されたもので、北西-南東方向に直線的に延びている。北側はSA-1・2に、南側は廃棄土壌であるSK-6に壊されている。

規模は、最大幅0.96mと比較的一定で、長さは残存値で2.72mを測る。溝の断面形はU字状で、深さは最大で8cmを測る。北端と南端との高低差は約2cmと北から南に向かって少しずつ低くなっている。埋土は、暗灰褐色砂質土である。出土した遺物は無く、遺構の時期ははっきりしないが、他の遺構との重複関係から16世紀後半以前、おそらく中世のものであろう。

5. 土壌（第6～8図）

土壌は、調査区東側に重複されて検出された巨大な廃棄土壌をはじめ、柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区全体にわたっている。ここでは、遺物が出土している土壌を中心に述べるものとする。

SK-1（第6図）

平面形は二等辺三角形に近く、規模は長径80cm、短径56cm、深さは10cmを測る。埋土は、暗灰褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉陶器の碗や大型の碗（第9図6・7）があり、土壌は11世紀頃のものと思われる。

SK-2（第6図）

平面形は長楕円形であるが、東側をSA-1・2によって、南側を他の土壌で壊されている。規模は長径で120cm以上、短径で64cm以上で、深さは11cmを測る。埋土は、炭混じりの黒褐色砂質土である。出土した遺物には棧瓦（第9図8）があり、土壌は江戸時代後期以降のものであろう。

SK-3 (第6図)

平面形は円形であったものと思われるが、東側をSK-2によって、西側半分を石垣によって壊されている。規模は最大径で64cm以上で、深さは16cmを測る。埋土は茶褐色砂質土である。出土した遺物には古代の須恵器・坏蓋、土師器・甕(第9図9・10)があり、土壙は8～9世紀代のものであろう。

SK-4 (第6図)

平面形は円形で、規模は径64cm、深さは41cmを測る。埋土は二層になっており、中心は黒褐色砂質土、周囲は灰色砂質土で、10～20cm大の礫が含まれていた。遺物は底板が出土するのみで遺構の時期は明らかではないが、おそらく江戸時代以降のものであろう。

SK-5 (第7図)

平面形は溝状で、規模は残存長2.1m、最大幅は40cm、深さは10cmである。土壙内からは、約3～10cm大の石が一面に出土し、遺物では陶器・甕・植木鉢、軒平瓦(第9図12～16)が出土しているが、明治期の歩兵第十八聯隊関連遺構の一部であるものと考えている。

SK-6～9 (第8図)

SK-6～9は調査区の東側で検出された廃棄土壙である。土壙群は重複しながら連続していたが、規模や深さが異なり、掘削に先後関係が確認できたため区別した。しかし、時期的には同時期に掘り、埋め戻す際の若干の時間差がある程度ということと、廃棄土壙という同様な性格から、ここではまとめて述べる。

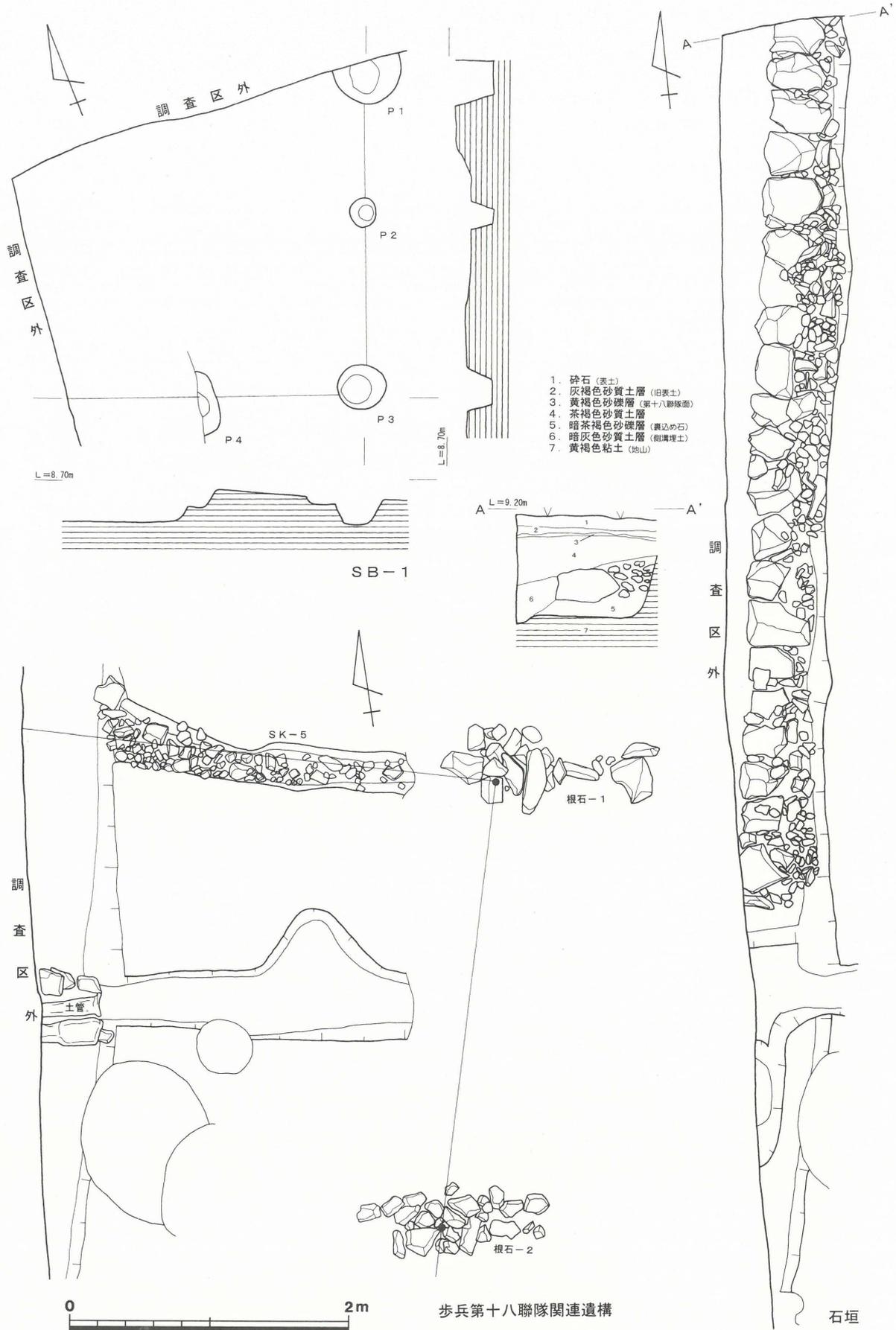
SK-6～9は東側及び南側を調査区外で欠くが、平面形は帯状で規模は長径11.7m以上、短径2.7m以上、深さは最大で0.7mである。各土壙は掘り方を壊されているので、底面の長さを中心に古い順から述べると、SK-7が一番古く、底面は平坦な長方形で、最大長は2.3m、深さは0.7mである。次いでSK-6が掘られ、底面は比較的平坦な方形と思われ、最大長は2.4m、深さは0.4mを測る。底面には径1.3mの円形で深さ8cmほどの土壙が認められた。次にはSK-8が古く、底面は平坦な長方形と思われ、最大長は3.0m、深さは0.5mである。最も新しいものは、SK-9で、底面は比較的平坦な長方形で、最大長は3.1m以上、深さは0.4mである。埋土はSK-6は暗茶褐色砂質土、SK-7は黒褐色砂質土、SK-8は黒灰色砂質土、SK-9は暗灰色砂質土である。出土遺物には、須恵器、中世陶器、陶器、瓦等(第9図17～第11図59)があり、殆どが江戸時代のものである。このことと、巨大な廃棄土壙という性格から、土壙は陸軍省が藩士屋敷を解体して歩兵第十八聯隊練兵場を整備した明治17～18(1884～1885)年に掘られたものと考えられる。

6. 歩兵第十八聯隊関連遺構 (第7図)

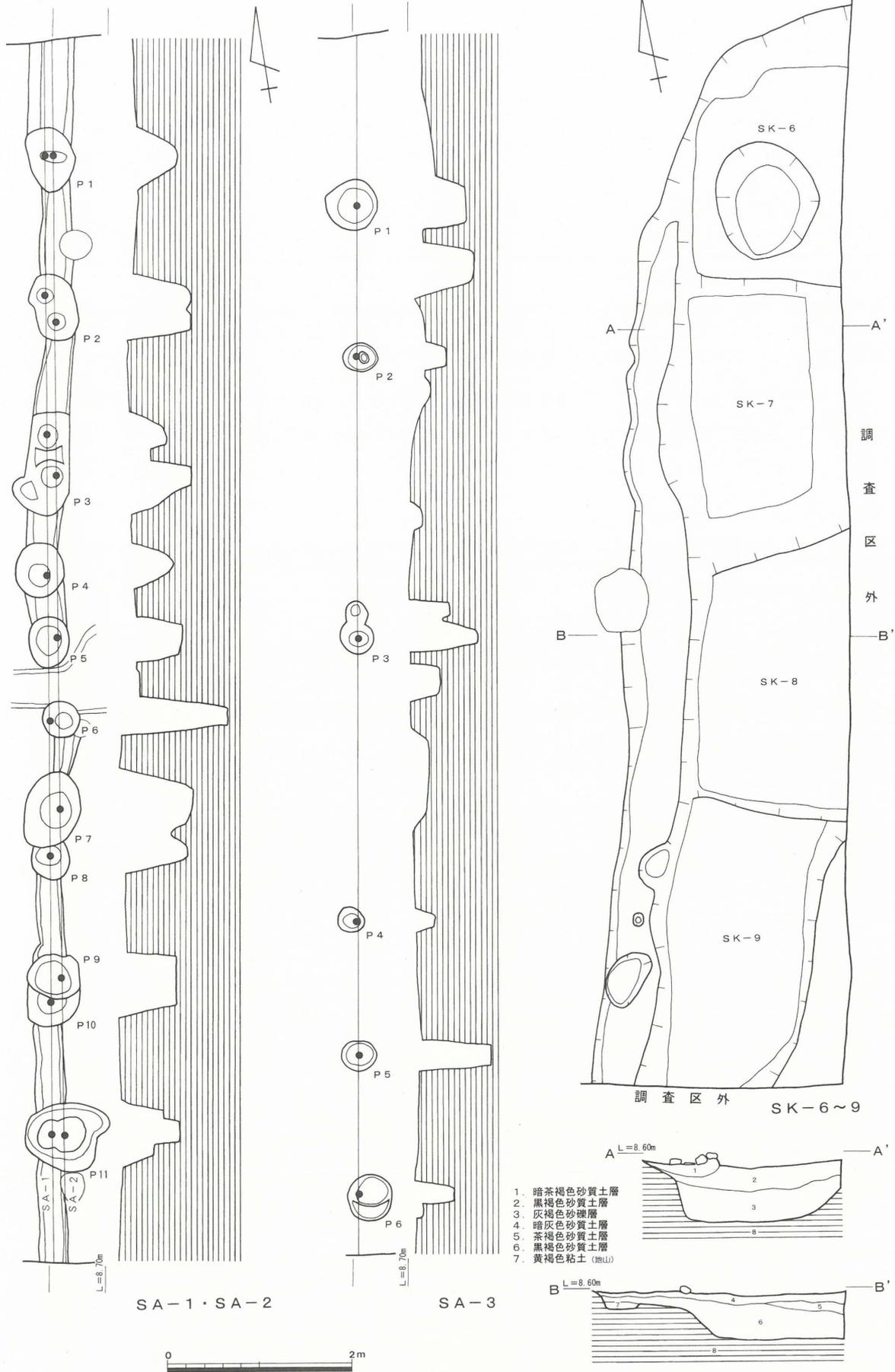
今回の調査では、土管を伴う明治以降の建物址と思われる遺構が検出されている。調査地は、吉田城廃城後は歩兵第十八聯隊の練兵場となった場所である。大正13年に撮影された写真(写真図版1-2)を見ると、調査地には建物等の構造物は存在しておらず、辺りは広場になっている。そしてこの地は、戦後の昭和24年には陸上競技場として整備され現在に至っている。歩兵第十八聯隊は、軍用地であるため機密性が高く、建物配置などは一部に写真や配置図などの記録が残っているのみで、不明な点が多い。このため、今回検出された明治以降の遺構を記録に残っていない歩兵第十八聯隊のものとして判断し、関連遺構として述べる。

歩兵第十八聯隊関連遺構 (第7図)

藩土屋敷解体時の廃棄土壌であるSK-7・8上に作られた建物と思われる遺構である。建物の平面形や規模等は不明であるが、検出された遺構には、礎石下の根石が2箇所、前述した石の混ざる溝状土壌(SK-5)が1基、土管及びその埋設のための溝が1条ある。遺構の配置を見ると、根石-1から南に3.2mの位置に根石-2があり、根石間の中央には、土管が東西方向に埋設されている。更に根石-1からは、溝状の土壌(SK-5)が東西方向に延びており、このことから遺構は根石-1が北東角に相当し、そこから西側と南側の調査区外に延びていることが考えられる。根石-1は、長さ約10~40cm大で長径1.6mの楕円形の範囲内に敷かれている。根石-2は、長さ約10~30cm大で長径1.4mの楕円形の範囲内に敷かれている。土管は径18cm、検出長は40cmである。土管の両側には約10~30cm大の石が並べられている。土管の先は、幅0.4m、長さ2.2mの溝が掘られている。出土遺物は、SK-5以外からは無い。



第7図 遺構実測図-1 (1/40)



第8図 遺構実測図-2 (1/40)

第4章 遺物 (第9～12図、第1表)

今回の調査で出土した遺物には、須恵器・灰釉陶器・中世陶器・陶器・磁器・土師器・瓦・鉄製品・木製品等があり、コンテナ箱(34×54×20cm)に4箱程度で、陶器の出土が比較的多い。なお、遺物についての細かな調整・法量等は第1表の観察表に記した。

SA-1・P3 (第9図1・2)

1は須恵器・蓋であるが、坏蓋なのか壺蓋なのかは細片のため断定できない。口縁端部を欠くが、口縁部は直立し、天井部と口縁部との境は段によって分けられている。内外面は回転ナデで調整されている。古墳時代のものである。2は中世陶器・碗の底部である。有高台の底部で、高台の断面形は台形である。調整は内外面回転ナデである。13世紀中葉のものであろう。

SA-2・P5 (第9図3)

3は須恵器・盤の口縁部破片で、口縁部はまっすぐ外方に延び、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。9世紀代のものである。

SA-2・P9 (第9図4)

4は中世陶器・碗の底部である。有高台の底部で、高台は低く潰れている。調整は内外面回転ナデである。13世紀後葉のものであろう。

SA-3・P3 (第9図5)

5は陶器・仏飯器の高台部破片である。高台は底面に向けて強く外反し、端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデで、外面に灰釉が施されている。美濃産で18世紀後葉のものである。

SK-1 (第9図6・7)

6は灰釉陶器・碗の底部である。有高台の底部で、高台の断面形は三日月形に近くやや内湾している。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切りである。10世紀後半～11世紀前半のものであろう。7は灰釉陶器・碗、口径26.8cmの大型の碗である。口縁部は緩やかに内湾し、端部付近で僅かに外反する。高台の断面形は三日月形に近くやや内湾している。調整は内外面回転ナデで、底面は回転ヘラケズリである。10世紀～11世紀前半のものであろう。

SK-2 (第9図8)

8は軒棧瓦の丸瓦部である。瓦当面の内区には三つ巴文があり、その周りの外区には珠文が12個巡らされている。時期は不明であるが、江戸時代以降のものである。

SK-3 (第9図9・10)

9は須恵器・坏蓋の口縁部破片である。口縁端部は下方に屈曲し丸くおさまられている。内外面は回転ナデで調整されている。8～9世紀代のものである。10は土師器・甕の口縁部破片である。内外面ナデである。8～9世紀代のものである。

SK-4 (第9図11)

11は木製品・底板の一部と思われるものである。本来は直径31cm程の円形を呈した板材で、桶等の底板であったものと思われる。残存する大きさは、長さ22.3cm、幅6.3cm、厚さは1.8cmを測る。江戸時代以降のものと思われる。

SK-5 (第9図12～16)

12は中世陶器・甕である。常滑産の平底である。調整は外面ケズリ、内面回転ナデで、底面は未調整である。中世のものである。13は、陶器・植木鉢の口縁部破片である。肥前産の染付で、口縁端部を屈曲させて幅広の面を作っている。調整は内外面とも回転ナデである。19世紀前半のものである。14～16は軒平瓦である。14・16は瓦当中心部の破片で、単線で三つ葉が表現されていたようである。15は瓦当端部の破片で、単線の唐草文が描かれている。これらは近世のものである。

SK-6 (第9図17～20)

17は須恵器・坏身の底部である。底部は無高台で、糸切り痕が認められる。調整は内外面回転ナデである。8世紀後葉～9世紀代のものである。18は甕の体部破片で、外面にタタキメが見られ、内面はナデである。古墳時代～古代のものである。19・20は中世陶器・小皿である。口縁部はやや外反し、端部はやや丸い。20は底部を欠損するが両者とも無高台のものと思われる。調整は内外面回転ナデである。13世紀頃のものであろうか。

SK-7 (第9図21～第10図34)

21は中世陶器・碗の底部破片である。高台の断面形は箱形で、調整は内外面ナデである。12世紀後半のものである。22は中世陶器・甕である。常滑産で、口縁部は外反し端部は幅広の縁帯をもつ。調整は内外面ナデである。13世紀前半のものである。23は陶器・碗である。信楽産のいわゆる丸碗で、口縁端部は丸い。底部はケズリである。調整は内外面回転ナデで、灰釉が施されている。外面には鉄絵も見られる。18世紀後葉のものと思われる。24は磁器・小碗である。型取りで作られており、調整は内外面回転ナデである。肥前産の染付で、19世紀前半のものと思われる。25は陶器・皿である。いわゆる摺絵皿で、口縁部は緩やかに内湾し、端部は丸い。高台は貼り付けられている。器面には灰釉が施され、内面には呉須絵が見られる。瀬戸産の18世紀後葉のものである。26は陶器・鍋である。注口部と把手部を欠損しているため、行平鍋か両手鍋かはわからない。口縁部は内湾し、端部でやや張り出し、内側に蓋受部が作られている。底部には丸い足が付く。調整は内面回転ナデ、外面は回転ヘラケズリで、灰釉が施されている。信楽産の19世紀前半のものである。27は陶器・植木鉢の底部破

片で、底部中央には孔があいており、側面には三足が付いている。外面にはヘラ彫文様である刺突列が見られ、全体に灰釉が施されている。調整は内外面回転ナデ、底部は回転ヘラケズリである。18世紀後葉の瀬戸産のものと思われる。28は陶器・植木鉢の口縁部破片である。口縁部はやや直立し、端部で肥厚され曲げられている。体部外面に沈線、刺突文が施され、灰釉地に鉄釉が流し掛けされており、調整は内外面回転ナデで、内面に指押さえ痕が見られる。27の底部と同一個体の可能性もあり、18世紀後葉の瀬戸産のものと思われる。29は土師器・皿である。体部と底部の境界は強く屈曲し、口縁部は外傾し端部は面を持つ。調整は内外面回転ナデである。近世のものか。30は土師器・碗の底部である。底面は平坦で、未調整である。近世のものと思われる。31は瓦器・鉢である。口縁部は外反し、端部はやや面をもつ。調整は内外面回転ナデである。近世のものである。32は木製品・敷居である。幅4.5cm、厚さ1.5cmの角材に、幅1cm程の溝を2列入れている。障子か襖の敷居の一部と思われる。近世のものであろう。33は鉄製品・小柄の刃部と思われるものである。3点が出土し、接合はできないが同一個体のものであると思われる。近世のものと思われる。34は鉄製品・玉で、直径1.6cmのほぼ球状をなしている。火縄銃の弾の可能性も考えられる。近世のものか。

SK-8 (第10図35~46)

35・36は須恵器・坏身である。35は口縁部はやや内湾し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。8~9世紀代のものであると思われる。36は底部破片で、底部は平坦で回転ヘラケズリがなされている。調整は内外面回転ナデである。8~9世紀代のものであろう。37・38は中世陶器・碗の底部破片である。37は体部は外方に開き底部は有高台で、高台の断面形は三角形である。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切り痕が認められる。12世紀後葉のものである。38は有高台の底部で、高台は扁平である。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切り痕が認められる。13世紀中葉のものである。39は陶器・碗である。口縁部、体部は直立し、底部との境界は強く屈折している。全体に灰釉が施され、呉須絵が見られる。調整は内外面回転ナデである。18世紀後葉~19世紀前葉の瀬戸産のものである。40は陶器・皿である。いわゆる馬目皿で、口縁部は内湾し端部は面をもつ。調整は内外面回転ナデで、内面に渦巻文が描かれている。瀬戸産で18世紀後葉~19世紀前葉のものであろう。41は磁器・碗である。肥前産の染付で、体部はやや内湾し、底部には削り出しの細い高台がある。調整は内外面回転ナデである。19世紀前半のものである。42は陶器・碗である。底部には削り出し高台があり、底部から体部へは大きく広がっている。調整は内外面回転ナデで、灰釉が施され内面に呉須絵、底部に銘が見られる。18世紀前半のものであろう。43は磁器・小瓶で、体部は膨らみ、頸部から口縁部にかけて直線的に延び筒状をなす。調整は内外面回転ナデである。肥前産の染付で、18世紀~19世紀前半のものと思われる。44は軒丸瓦であり、瓦当面の中心に三ツ巴文を置き周りに珠文を巡らしている。近世のものである。45・46は軒平瓦であり、重線で中心飾りの唐草文が見られる。近世のものである。

SK-9 (第10図47~第11図59)

47は須恵器・甕の体部破片であり、調整は内面回転ナデ、外面はタタキメである。古墳時代~古代のものである。48は中世陶器・碗の底部破片である。有高台の底部で、高台は扁平である。調整は内

外面回転ナデで、底面に糸切り痕が認められる。13世紀後半のものである。49は陶器・碗である。いわゆる腰鑄と呼ばれもので灰釉が施されるが、体部以下は鉄釉が漬けられている。口縁部は真っ直ぐに立ち上がり、端部はやや丸い。体部外面に3条の沈線が巡らされている。瀬戸産で19世紀中葉のものであろう。50は陶器・水甕である。口縁部は僅かに外反し、内面に張り出しが見られる。外面にはヘラ彫文様が見られ、灰釉地に緑釉の流し掛けがされている。調整は内外面回転ナデである。瀬戸産で19世紀前半のものと思われる。51は陶器・鍋である。体部は直立し口縁部で外反し、端部付近で内湾する。調整は内外面回転ナデで、全体に錆釉が掛かる。18世紀後半の美濃産のものである。52は磁器・植木鉢である。口縁端部を屈曲させて幅広の面を作っている。底部には三足を付け、底に穴をあけている。調整は内外面とも回転ナデである。肥前産の染付で、底部に墨書が見られる。19世紀中葉のものである。53は磁器・蓋であるが、摘み部を欠損している。体部は緩やかに内湾し、口縁部で強く屈曲する。肥前産の染付で、調整は内外面回転ナデである。18～19世紀のものである。54は磁器・碗の破片である。口縁部は直立し、端部は尖る。肥前産の染付で、調整は内外面回転ナデである。18～19世紀のものである。55は磁器・碗である。体部はやや内湾し、底部には細い高台がある。肥前産の染付で、調整は内外面回転ナデである。19世紀代のものである。56は軒棧瓦であり、瓦当面の中心に三ツ巴文を置き、周りに珠文を巡らしている。近世以降のものである。57～59は軒平瓦である。57は、瓦当面に3葉の中心飾りがあり、その両側には単線による唐草文が見られる。58・59は重線の唐草文が見られる。近世のものである。

石垣側溝（第11図60～62）

60は須恵器・坏身の底部破片である。底部は無高台で平坦面をなす。調整は内外面回転ナデで、底面は摩滅のため不明である。8～9世紀代のものであろう。61は須恵器・坏蓋の口縁部破片である。口縁端部は下方に屈曲し丸くおさめられている。内外面は回転ナデで調整されている。8～9世紀代のものである。62・63は須恵器・甕の体部破片である。調整は外面タタキメであるが、内面は同心円文（62）、回転ナデ（63）である。古墳時代～古代のものである。64は中世陶器・碗の底部破片である。有高台の底部で、高台の断面形は三角形に近い。調整は内外面回転ナデで、底面に糸切り痕が認められる。12世紀後葉～13世紀前葉のものである。65は中世陶器・壺の底部破片である。有高台の底部で、高台の断面形は台形に近い。調整は内外面回転ナデである。中世のものである。

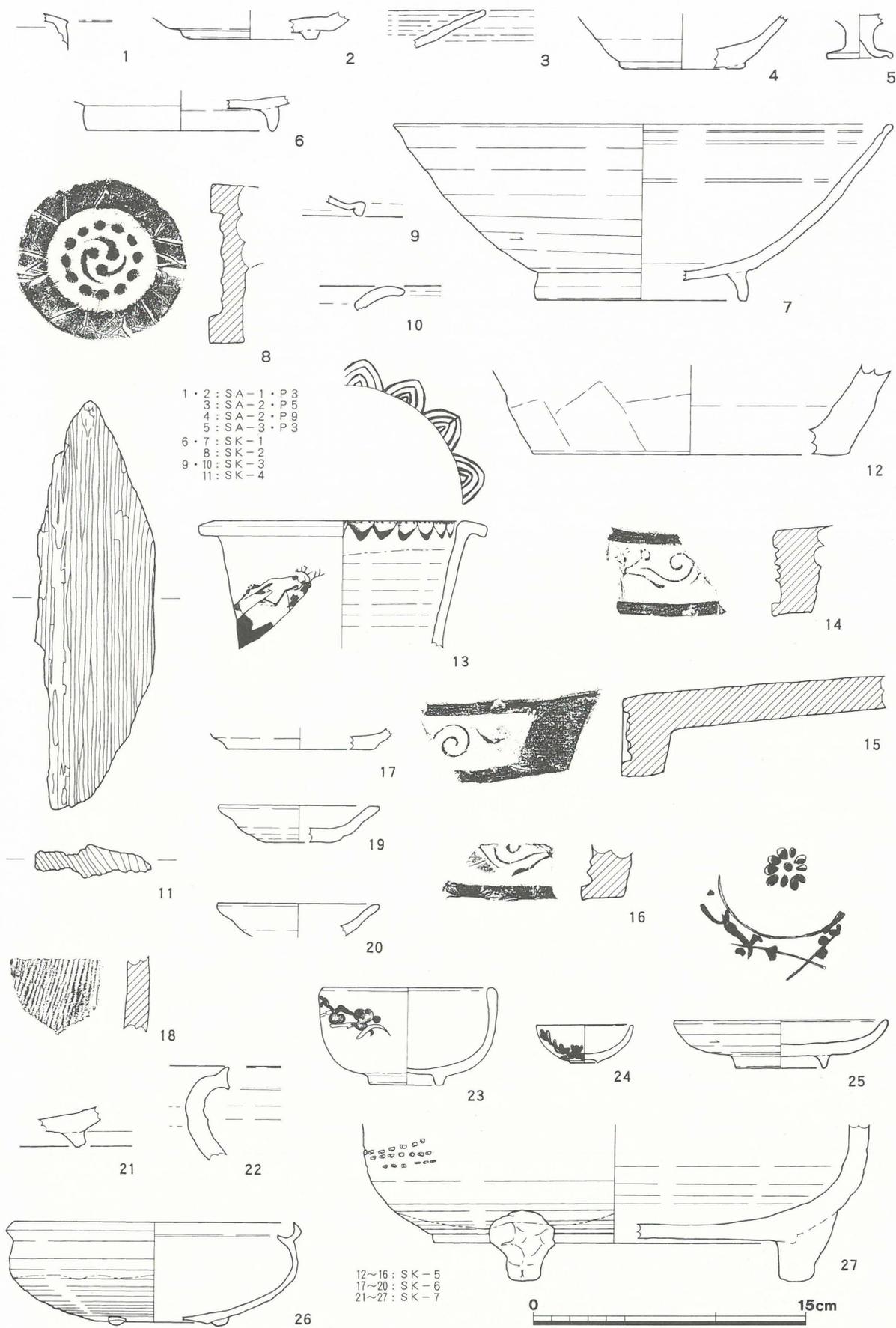
表土（第11図66～第12図90）

66は須恵器・坏身の底部破片で、底部は平坦である。調整は内外面回転ナデであるが、底面は摩滅して不明である。8～9世紀代のものであろう。67は須恵器・甕の体部破片である。厚みがあるため当初は古代瓦の可能性を考えたが、若干ではあるが四方向に内湾しているため甕の体部破片と扱った。調整は外面タタキメ、内面はナデである。古墳時代～古代のものである。68も須恵器・甕の体部破片で、調整は外面タタキメ、内面は回転ナデである。古墳時代～古代のものである。69は中世陶器・小皿で、口縁部は内湾し、端部は丸く収める。調整は内外面回転ナデである。13世紀中葉のものであろう。70は陶器・碗である。いわゆる腰鑄と呼ばれもので灰釉と鉄釉とに上下掛け分けられている。口

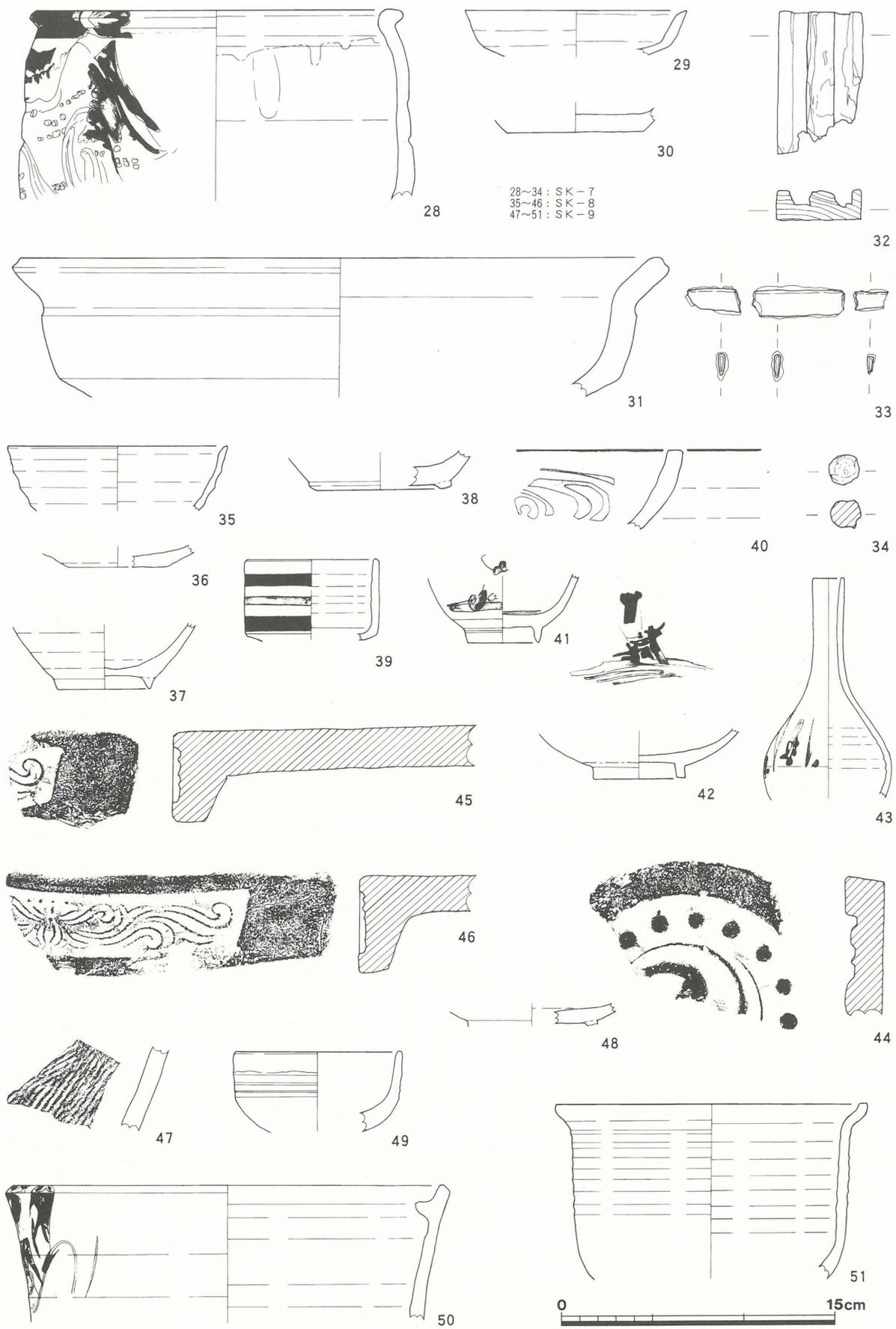
縁部は直立し端部は丸く、体部は丸く屈曲し3条の沈線が巡らされている。底部は削り出し高台である。調整は内外面回転ナデである。19世紀前葉の瀬戸産のものと思われる。71は陶器・蓋である。天井部は笠状になり、円形の摘みが付く。口縁部は内面よりやや内傾して立ち上がり、端部はやや尖る。調整は外面回転ナデ、内面は回転ヘラケズリの可能性がある。土瓶等の蓋であろう。瀬戸産で18～19世紀のものである。72は陶器・摺鉢の口縁部破片である。口縁部はハ字状に大きく開き、端部は肥厚してある。調整は内外面回転ナデで、全体に錆釉が施されている。瀬戸産で、19世紀中葉のものである。73は陶器・甕の底部破片である。有高台の底部破片で、高台の断面形は箱形に近い。調整は内外面回転ナデで、底面は回転ヘラケズリである。柿釉が施され、底面には墨書が見られる。瀬戸産で19世紀代のものである。74・75は陶器・ひょうそくである。口縁部は内湾し、体部はハ字状に広がる。底部には円盤状の台が付けられている。内面に芯受けが貼り付けられている。調整は内外面回転ナデで、底部には糸切り痕が見られる。体部上半分に鉄釉が漬けられている。瀬戸産で74は19世紀中葉、75は19世紀前葉のものと思われる。76は磁器・碗である。体部はやや内湾し、底部には貼り付けられた細い高台がある。調整は内外面回転ナデで、底に銘が入れられている。肥前産の染付で、18～19世紀中葉のものである。77は磁器・碗である。体部はやや内湾し、底部には貼り付けられた細い高台がある。調整は内外面回転ナデで、底に銘が入れられている。瀬戸産の染付で、19世紀中葉のものである。78は磁器・鉢である。平面形は隅丸方形で、口縁部は直立し、端部はやや面をもつ。高台は直立している。調整は内外面回転ナデである。鉢は一度割れていたらしく焼き継ぎが行われており、底に焼き継ぎをしたことを示す「×」の印が入れられていた。この鉢は肥前産の染付で、19世紀のものと思われる。79は磁器・蓋である。肥前産の染付で、口縁部はやや内湾し、頂部には環状の摘みが付く。調整は内外面回転ナデである。19世紀のものである。80は磁器・仏飯器である。口縁部はほぼ直立し、端部は尖る。体部は丸く、平坦な底面に向けてラッパ状に広がる脚部が付く。調整は内面回転ナデ、外面と底面は回転ヘラケズリである。肥前産の染付で、18世紀後葉～19世紀中葉のものである。81は土師器・鍋の口縁部破片である。いわゆる内耳鍋で、口縁部は内湾し、端部はナデ窪められている。調整は内外面ナデで、内面に指押さえ痕が見られる。16世紀後半～19世紀のものである。82は焼き塩壺である。体部から口縁部にかけて、やや外傾しながら真っ直ぐ伸びる円柱に近い器形で、底面と蓋受け部を欠損している。調整は内外面ナデで、外面に指押さえ痕が見られる。破片であるため体部の刻印は見られない。18世紀以降のものである。83～85は軒平瓦である。83は単線による唐草文が、84・85は重線の唐草文が見られる。近世のものである。86・87は軒棧瓦であり、瓦当面の中心に巴文を置き周りに珠文を巡らしている。近世以降のものである。88はかすがいである。鉄製で、断面形は直径1.9cmの円形である。近世のものと思われる。89・90は釘である。鉄製で、断面形は方形であったものと思われる。釘隠?と思われる径3cm程の金具が付着したまま錆付いている。近代のものであろう。

参考文献

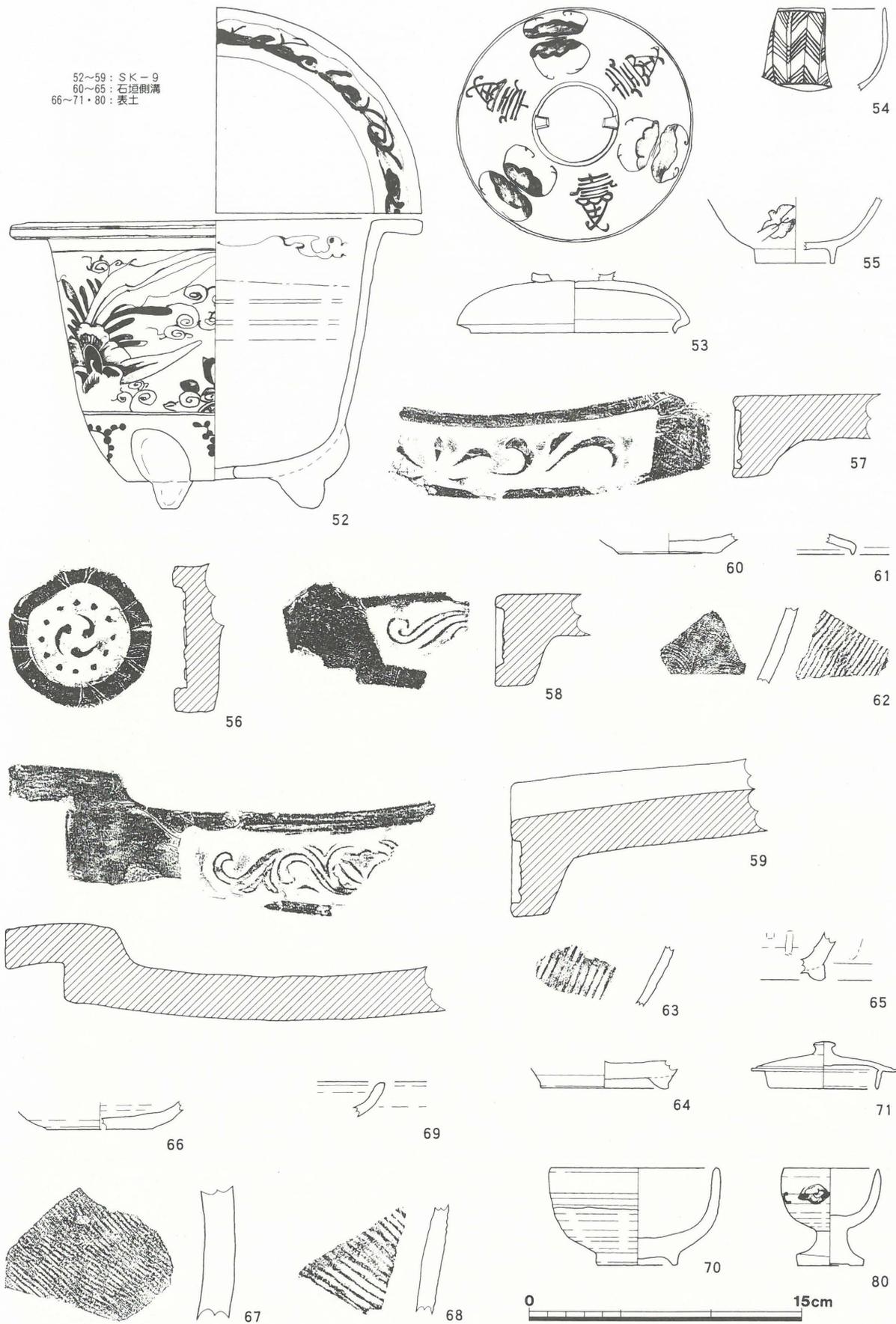
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎編 1996 『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』



第9図 出土遺物実測図-1 (1/3)



第10図 出土遺物実測図一2 (1/3)



第11图 出土遺物実測図-3 (1/3)



第12図 出土遺物実測図一4 (1/3)

第1表 出土遺物観察表

遺物 No	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整	備考
9-	1	SA-1・P3	S 蓋				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
	2	SA-1・P3	P 碗	(1.5)	6.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
	3	SA-2・P5	S 盤				密	良好	青灰色	内外面回転ナデ	
	4	SA-2・P9	P 碗	(2.9)	6.7		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	高台部に粉殻痕
	5	SA-3・P3	T 仏飯器	(2.3)	3.6		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、灰釉	美濃産
	6	SK-1	K 碗	(2.2)	10.3		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
	7	SK-1	K 碗	26.8	9.5	11.2	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	底部回転ヘラケズリ
	8	SK-2	N 軒棧瓦	直径8.7			密	良好	黒灰色	ナデ、三ツ巴文	
	9	SK-3	S 坏蓋				密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
	10	SK-3	H 甕				密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
	11	SK-4	W 底板	長さ22.2、幅6.2、厚さ1.9					暗褐色	ケズリ	
	12	SK-5	P 甕	(4.8)	17.2		密	良好	淡赤褐色	内面回転ナデ、外面ケズリ、底部未調整	
	13	SK-5	Z 植木鉢	15.6	(6.3)		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、染付	肥前産
	14	SK-5	N 軒平瓦				密	良好	黒灰色	ナデ、三つ葉文	
	15	SK-5	N 軒平瓦				密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
	16	SK-5	N 軒平瓦				密	良好	黒灰色	ナデ、三つ葉文	
	17	SK-6	S 坏身	(1.1)	7.9		密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
	18	SK-6	S 甕				密	良好	淡灰色	外面タタキメ、内面ナデ	
	19	SK-6	P 小皿	8.6	2.0	3.8	密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
	20	SK-6	P 小皿	8.6	(1.6)		密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
	21	SK-7	P 碗				密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
	22	SK-7	P 甕				密	良好	灰色	内外面ナデ	常滑産
	23	SK-7	T 碗	9.2	5.3	4.0	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部削り、鉄絵、灰釉	信楽産
	24	SK-7	Z 小碗	5.3	2.1	1.5	密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、型取り、染付	肥前産
	25	SK-7	T 皿	11.4	2.6	4.9	密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、貼り付け高台、具須絵、灰釉	瀬戸産
	26	SK-7	T 鍋	15.0	5.6	6.2	密	良好	淡黄灰色	内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリ、足貼り付け、灰釉	信楽産
	27	SK-7	T 植木鉢	(8.6)	19.6		密	良好	淡黄灰色	内外面回転ナデ、底部穿孔・回転ヘラケズリ、灰釉	瀬戸産
10-	28	SK-7	T 甕	20.1	(10.3)		密	良好	淡黄灰色	内外面回転ナデ、外面ヘラ影文、灰釉地に鉄釉流し掛け	瀬戸産
	29	SK-7	H 皿	12.0	(2.4)		密	良好	燈褐色	内外面ナデ	
	30	SK-7	H 碗	(1.3)	7.1		密	良好	淡褐色	内外面ナデ、底部未調整	
	31	SK-7	N 鉢	(7.5)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
	32	SK-7	W 敷居	長さ7.7、幅4.5、厚さ1.6					淡茶褐色	幅約1.0cmの2条の溝あり	
	33	SK-7	I 小柄	長さ9.9以上、幅1.8					茶褐色	三分割	
	34	SK-7	I 玉	径1.6					茶褐色	ほぼ球形	
	35	SK-8	S 坏身	11.9	(3.5)		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
	36	SK-8	S 坏身	(0.7)	5.2		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
	37	SK-8	P 碗	(3.4)	4.8		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
	38	SK-8	P 碗	(2.0)	7.7		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
	39	SK-8	T 碗	(4.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、具須絵、灰釉	瀬戸産
	40	SK-8	T 皿				密	良好	乳白色	内外面回転ナデ、具須絵、灰釉	瀬戸産
	41	SK-8	Z 碗	(3.6)	3.8		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	肥前産
	42	SK-8	Z 碗	(2.6)	5.0		密	良好	淡黄灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、灰釉、具須絵、底部に銘	肥前産
	43	SK-8	Z 小瓶	1.8	(11.9)		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、染付	肥前産
	44	SK-8	N 軒丸瓦				密	良好	黒灰色	ナデ、三ツ巴文	
	45	SK-8	N 軒平瓦				密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	

遺物 No	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整	備考
46	S K - 8	N軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
47	S K - 9	S甕					密	良好	淡灰色	内面ナデ、外面タタキメ	
48	S K - 9	P碗		(1.2)	7.0		密	良好	淡灰色	内外面ナデ、底部糸切り	
49	S K - 9	T碗	9.1	(4.3)			密	良好	淡灰色・黒褐色	内外面回転ナデ、体部沈線、上部灰釉、下部鉄釉	瀬戸産
50	S K - 9	T水甕	23.9				密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナデ、灰釉に緑釉の流し掛け、ヘラ彫文	瀬戸産
51	S K - 9	T鍋	16.8	(7.5)			密	良好	暗茶褐色	内外面回転ナデ、錆釉	美濃産
11 - 52	S K - 9	Z植木鉢	22.3	(9.4)	9.2	孔1.8	密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、底部穿孔・三足、染付、底部墨書	肥前産
53	S K - 9	Z蓋	11.0	15.6			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、染付	肥前産
54	S K - 9	Z碗		(3.3)			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、染付	肥前産
55	S K - 9	Z碗			3.5		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、底部ケズリ、染付	肥前産
56	S K - 9	N軒棧瓦	径7.8	(3.6)			密	良好	黒灰色	ナデ、三ツ巴	
57	S K - 9	N軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、三つ葉、唐草文	
58	S K - 9	N軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
59	S K - 9	N軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
60	石垣側溝	S坏身		(1.1)	5.7		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部摩滅	
61	石垣側溝	S坏蓋					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
62	石垣側溝	S甕					密	良好	淡灰色	内面同心円文、外面タタキメ	
63	石垣側溝	S甕					密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面タタキメ	
64	石垣側溝	P碗		(1.5)	7.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
65	石垣側溝	P壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
66	表土	S坏身		(1.5)	5.6		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部摩滅	
67	表土	S甕					密	良好	淡灰色	内面ナデ、外面タタキメ	
68	表土	S甕					密	不良	淡褐色	内面回転ナデ、外面タタキメ	
69	表土	P小皿					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
70	表土	T碗	9.1	5.2	5.8		密	良好	淡灰色・黒褐色	内外面回転ナデ、体部沈線、上部灰釉、下部鉄釉、削り出し高台	瀬戸産
71	表土	T蓋	5.9	2.6			密	良好	淡灰色	外面回転ナデ、内面回転ヘラケズリ、灰釉	瀬戸産
12 - 72	表土	T播鉢	34.2	(5.8)			密	良好	暗褐色	内外面回転ナデ、錆釉	瀬戸産
73	表土	T甕		(3.0)	11.4		密	良好	淡茶褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ・墨書	瀬戸産
74	表土	Tひょうそく	6.1	4.2	3.8		密	良好	黒褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り、鉄釉	瀬戸産
75	表土	Tひょうそく	7.4	5.1	4.0		密	良好	黒褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り、鉄釉	瀬戸産
76	表土	Z碗		(2.5)	4.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、貼り付け高台、染付、底に銘	肥前産
77	表土	Z碗		(4.2)	4.0		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、貼り付け高台、染付	瀬戸産
78	表土	Z鉢	16.6	6.8	5.2		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、染付、焼き継ぎ品	肥前産
79	表土	Z蓋	9.8	3.1	4.2		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、染付	肥前産
11 - 80	表土	Z仏飯器	5.1	5.3	3.6		密	良好	灰白色	内面回転ナデ、外面・底部回転ヘラケズリ、染付	肥前産
12 - 81	表土	H鍋					密	良好	淡褐色	内外面ナデ、指押さえ	
82	表土	D壺		(7.2)	5.2		密	良好	褐色	内外面ナデ、指押さえ	
83	表土	N軒平瓦	長さ27.6				密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
84	表土	N軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
85	表土	N軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
86	表土	N軒棧瓦	直径8.7				密	良好	黒灰色	ナデ、三ツ巴文	
87	表土	N軒棧瓦	直径7.9				密	良好	黒灰色	ナデ、三ツ巴文	
88	表土	Iかすがい	長さ17.7、幅6.2						淡茶褐色		
89	表土	I釘	長さ5.9、幅3.4						淡茶褐色		
90	表土	I釘	長さ6.9、幅3.3						淡茶褐色		

* S - 須恵器 K - 灰釉陶器 P - 中世陶器 T - 陶器 Z - 磁器 H - 土師器 R - 石製品 D - 土製品 N - 瓦・瓦器 W - 木製品
I - 鉄製品

法量の単位はcm、()は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

第5章 まとめ

1. 倉垣源左衛門邸出土陶磁器の組成について

今回の調査では、吉田城廃城時の廃棄土壌（SK-6～9）を中心に陶磁器が出土している。調査地は、廃城時は倉垣源左衛門邸内（註1）に相当する。倉垣源左衛門は、寛延2年（1749）に7万石で浜松から転封してきた大河内松平家の家臣であり、吉田藩では中老という要職に付く上級武士であった。そして、出土した陶磁器は18世紀中葉～19世紀中葉と大河内松平家が吉田城に転封した18世紀中葉以降のもので、近世でも17世紀～18世紀前葉の時期の陶磁器は確認されていない。また、近代は軍の練兵場として使用されたため近代のものは無く、時期が限定される良好な資料である。ここでは、倉垣邸から出土した陶磁器について、陶器・磁器に分けて用途分類及び産地による組成を調べる。なお、陶磁器の年代・産地同定は藤澤良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）にお願いした。

分類・統計方法：陶磁器の量は、コンテナ箱（34cm×54cm×20cm）の1箱分と少なかった。これらの陶磁器は戦国時代以前（註2）と近世（18世紀中葉～19世紀中葉）とに分類でき、今回は近世の陶磁器のみを扱う。さて分類であるが、まず陶器と磁器に二分し、両者を産地別に分類する。産地は瀬戸、美濃、肥前、その他と量の多いものを中心に分けた。こうして、産地別に分けた陶器・磁器をその用途によって分け、更に各器種に分類（註3）した。そして、各器種ごとに個体数を算出し、それを用途ごとにまとめて統計した。なお、個体数の算出には個体識別法を用いた。これは、口縁部と底部の残存している破片を対象にし、破片を観察して個体数を算出する手法である。今回は陶磁器量が少ないため、口縁部計測法や破片数計算よりも個体識別法が有効と考え、これを用いた。

組成分析：調査で出土した陶磁器の総個体数は109個体であった。このうち陶器は60個体（55.05%）、磁器は49個体（44.95%）と僅かに陶器が多かった。用途別にみると、供膳具が57.80%と最も多く、調理具11.01%、灯火具と貯蔵具が6.42%と続くように日常品が多いが、火具が全く出土していない。調度具は5.50%見られたがその殆どは植木鉢であり、植物栽培を嗜好していたようである。神仏具は4.59%と比較的高かった。次に陶器、磁器別の組成を見よう。陶器では、供膳具43.33%、調理具20.00%、貯蔵具11.67%、灯火具10.00%と陶磁器全体の割合より日常品の比率が高くなっているが、供膳具は低下している。一方、磁器では、供膳具が75.51%と極めて高く、神仏具8.16%、調度具8.16%と供膳具以外は日常生活で使用頻度の低いものが比較的高い。このように、陶器では生活用品が、磁器では生活と間接的なものが多く、陶器と磁器とでは使用目的が異なり、使い分けがなされていたようである。特に磁器は陶器より高級品であるため、供膳具などは来客時やハレの場で用いるなど、日常的に使われなかった可能性がある。また陶器、磁器をそれぞれ産地別に見ると、陶器では瀬戸が48.33%と最も高く、美濃が31.67%と、両者で80.00%と大半を占めている。このうち美濃では、灯火具の割合が6.67%と高く、逆に貯蔵具が1.67%と低い結果であった。これに対し磁器では、肥前が85.71%と圧倒的な数値を占めている。陶器では供膳具が1個体しか出土していない肥前であるが、

磁器では供膳具が31個体（63.27%）と過半数を超え、神仏具や調度具も8.16%も見られる。陶磁器全体から見ても、肥前の磁器は38.71%と高い割合である。しかし、吉田城に一番近い産地である瀬戸は、磁器では供膳具で6.12%見られるが、他の用途のものはなく、美濃に至っては皆無である。このように倉垣邸では、陶器では瀬戸や美濃の製品を用い、磁器では肥前の製品を用いていたと言えよう。

組成比較：これらの組成を他調査データと比較しよう。まず吉田城では、県埋文センターが隣接する藩士屋敷で第8次調査を行っている。出土陶磁器の組成（註4）は供膳具53.17%、灯火具5.32%、貯蔵具8.46%、調理具8.12%、神仏具4.19%、火具2.50%、調度具5.31%であり、陶器と磁器の割合は陶器53.84%、磁器46.16%と倉垣邸調査の数値とほぼ同じであった点は興味深い。

一方、吉田藩内の三河湾に面した半農半漁村に所在する大西貝塚からも近世陶磁器（註6）が出ており、その組成は供膳具38.2%、灯火具20.6%、貯蔵具3.9%、調理具21.6%、神仏具4.9%、火具6.9%、調度具3.9%と、生活用品の割合が倉垣邸に比較して高かった。またその産地も、瀬戸美濃が58.8%を占めるのに対し肥前系は5.9%しかなく、肥前系陶磁器の少なさが指摘されている。この肥前系陶磁器量の差が、上級武士と農漁民との消費階層差を表しているものと考えられる。

ところで藩は異なるが、同じ上級武士の名古屋城三の丸遺跡（家庭・簡易裁判所地点）でも調査が行われている。倉垣邸と同時期のSK084出土遺物を代表させ組成を比較（註5）してみよう。用途の割合は、倉垣邸とほぼ同じであるが、灯火具と貯蔵具の割合が名古屋城三の丸遺跡の方が高い。また、陶器と磁器の割合は、陶器が76.3%に対し磁器は22.2%と非常に少なく、他地点例を見ても名古屋城三の丸遺跡は全般的に磁器の割合が少ない。また陶磁器全体で見た産地も、瀬戸の陶器が75.1%に対し肥前の陶器は1.1%、瀬戸の磁器が22.2%に対し肥前の磁器は1.5%と、藩内にある瀬戸の製品が大半を占めており、倉垣邸の様相とは異なっている。

まとめ：以上、倉垣邸から出土した陶磁器の組成を調べた結果、吉田城第8次調査の結果とほぼ同様な組成データを得ることができた。そして、以前から指摘されていた吉田城での磁器の割合が高い点も、今回再確認された。これに加え、磁器の大半が肥前であることが確認された点の意義は大きい。肥前地域に残る19世紀中葉の史料に陶磁器の国別出荷高があり、三河には尾張の2.7倍の陶磁器が出荷されていたそうである。今回の産地組成は、消費地サイドでそれを裏付ける貴重なものとなった。しかし、近くに瀬戸があるのになぜ磁器は肥前なのか。19世紀になって瀬戸で新製が焼かれるようになり名古屋城では磁器が肥前から瀬戸へ変わるが、吉田城ではなぜ肥前を替わず用いたのであろうか。肥前の磁器は高級感があったことは事実である。肥前が多い理由には、上級武士である倉垣源左衛門の単なる趣向なのか、それとも瀬戸を管理していた尾張藩の政策によって、新製の出荷先が限定され吉田藩内であまり流通していなかったのか、両者が考えられるが現段階では結論付けられない。

註1 倉垣源左衛門は転封後、初代長義から2代長富、3代長世まで続いて明治を迎えている。

註2 戦国時代以前の陶磁器には、中世は常滑(甕)や古瀬戸(碗)、輸入陶磁器(青磁碗・陶器碗)、戦国期は瀬戸美濃(碗・天目茶碗・摺鉢)、志野(皿)が若干(破片数計15点)あるのみである。

註3 用途・器種分類に際しては、文献（註5）に準じて分類を行ったが、他調査例と比較するため、化粧具、喫煙具は割愛し、用途順序は変更してある。また、今回は器形レベルまでの分類は行

わなかった。これは陶磁器の大半は破片のため、殆どが器形まで把握できなかったことによる。

註4 文献註5の接合口縁残存率のデータを陶磁器のみの数値に改変している。

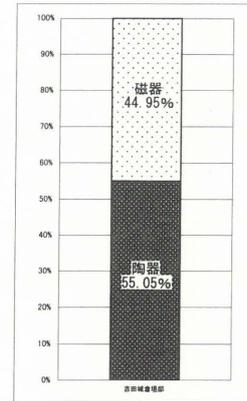
註5 愛知県埋蔵文化財センター 1995 『吉田城遺跡Ⅱ』

註6 野末浩之 1995 「第5章2C 平安時代以降の土器」『大西貝塚』豊橋市教育委員会他

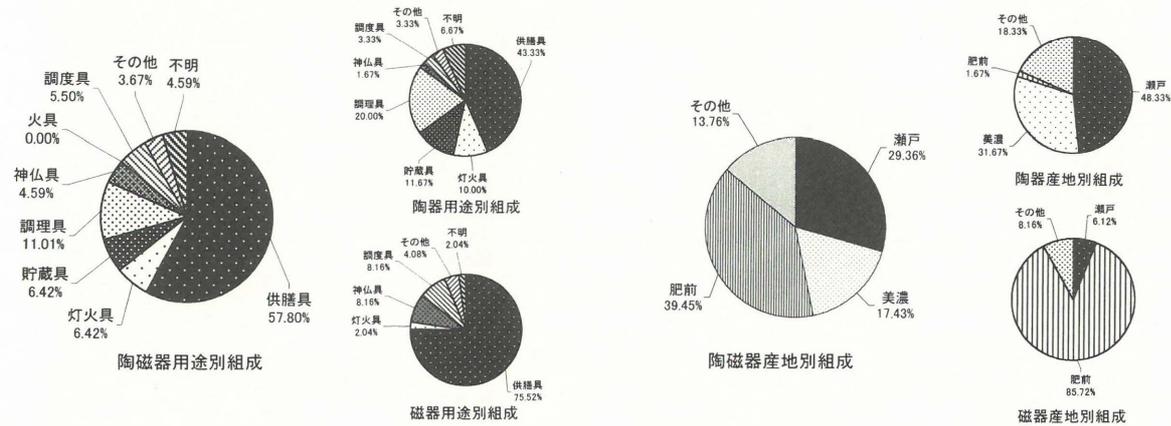
陶磁器用途産地別集計表

		供膳具	灯火具	貯蔵具	調理具	神仏具	火具	調度具	その他	不明	合計
陶器	瀬戸	14 (23.33) 《12.84》	2 (3.33) 《1.83》	5 (8.33) 《4.59》	5 (8.33) 《4.59》	0	0	2 (3.33) 《1.83》	1 (1.67) 《0.92》	0	29 (48.33) 《26.61》
	美濃	6 (10.00) 《5.50》	4 (6.67) 《3.67》	1 (1.67) 《0.92》	5 (8.33) 《4.59》	1 (1.67) 《0.92》	0	0	1 (1.67) 《0.92》	1 (1.67) 《0.92》	19 (31.67) 《17.43》
	肥前	1 (1.67) 《0.92》	0	0	0	0	0	0	0	0	1 (1.67) 《0.92》
	その他	5 (8.33) 《4.59》	0	1 (1.67) 《0.92》	2 (3.33) 《1.83》	0	0	0	0	0	11 (18.33) 《10.09》
	小計	26 (43.33) 《23.85》	6 (10.00) 《5.50》	7 (11.67) 《6.42》	12 (20.00) 《11.01》	1 (1.67) 《0.92》	0 (0) 《0》	2 (3.33) 《1.83》	2 (3.33) 《1.83》	2 (3.33) 《1.83》	4 (6.67) 《3.67》
磁器	瀬戸	3 (6.12) 《2.75》	0	0	0	0	0	0	0	0	3 (6.12) 《2.75》
	美濃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 (0) 《0》
	肥前	31 (63.27) 《28.44》	0	0	0	4 (8.16) 《3.67》	0	4 (8.16) 《3.67》	2 (4.08) 《1.83》	1 (2.04) 《0.92》	42 (85.71) 《38.53》
	その他	3 (6.12) 《2.75》	1 (2.04) 《0.92》	0	0	4 (8.16) 《3.67》	0	4 (8.16) 《3.67》	2 (4.08) 《1.83》	1 (2.04) 《0.92》	4 (8.16) 《3.67》
	小計	37 (75.51) 《33.94》	1 (2.04) 《0.92》	0 (0) 《0》	0 (0) 《0》	4 (8.16) 《3.67》	0 (0) 《0》	4 (8.16) 《3.67》	2 (4.08) 《1.83》	1 (2.04) 《0.92》	49 (100) 《44.95》
合計	63 (100) 《57.80》	7 (11.11) 《6.42》	7 (11.11) 《6.42》	12 (18.18) 《11.01》	5 (7.74) 《4.59》	0 (0) 《0》	6 (9.38) 《5.50》	4 (6.19) 《3.67》	5 (7.74) 《4.59》	109 (100) 《100》	

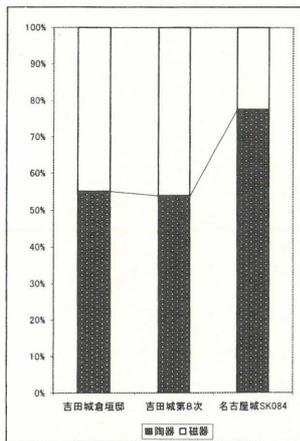
※数値の上段は個体数、() は陶器、磁器別の%、《 》は全体中の%



陶器・磁器の割合

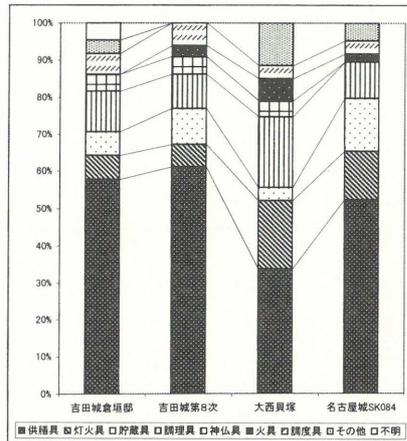


他調査データとの比較



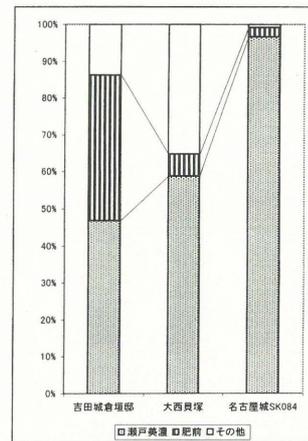
陶器・磁器の割合の比較

※1 吉田城第8次のデータは、陶磁器のみに改変



陶磁器用途別組成の比較

※2 名古屋城データは註5文献による ※3 産地別組成の比較・吉田城倉垣部の瀬戸美濃の数値は、両者を合算した数値である



陶磁器産地別組成の比較

第13図 倉垣邸出土陶磁器用途産地別組成

2. まとめ

今回の18次調査では、藩士屋敷地に相当する箇所を調査した。調査では、藩士屋敷地石垣及び塀などが検出されたほか、取り壊し時の廃棄土壌、軍隊関係の遺構なども見つかっている。また、過去の調査でも見られた築城以前の遺構や遺物も出土している。ここでは、検出された遺構や遺物を、吉田城（今橋城）築城以前、築城以後、廃城後の3期に分けて検討し、調査の概要をまとめる。

【吉田城築城以前】

吉田城築城以前のものには、遺物が出土して明確な遺構では、10世紀後半～11世紀前半のSK-1と8～9世紀代のSK-3のみしかない。この他に、切り合い関係から中世頃と推定されるものにはSB-1、SD-1がある。出土遺物では、須恵器・坏身・坏蓋・盤・甕、灰釉陶器・碗、中世陶器・碗・小皿・壺・甕、土師器・甕などがある。最も古いものに古墳時代の蓋が1点あり、過去の調査と同様にこの辺りにも古墳もしくは当時の集落があった可能性が考えられる。古代の須恵器や土師器も量は少ないが出土しており、特に8～9世紀代のものが目立つ。近年、付近に官衙的施設所在の可能性が指摘されており、17次など過去の調査でも掘り方が方形の総柱建物や溝や古代の遺物が出土している。このことから、古代に官衙的な施設または集落が周辺に存在していたことが考えられる。

次の中世では、掘立柱建物、溝や12～13世紀代の遺物が比較的まとまって出土している。過去の調査でも中世のものは多く出土しており、調査区内の時期不明土壌の大半は中世のものと思われる。おそらく、中世に大規模な集落が営まれていたものと思われる。

【吉田城築城以後】

築城以後のものには、遺構では石垣、塀があり、遺物では陶磁器、土師器、瓦、木製品、鉄器などがある。調査地は幕末では吉田藩の中老という要職で、石高230石の倉垣源左衛門邸に相当する。倉垣邸は、川毛通と八幡小路の交差する南東角地に位置し、南北約65m、東西約45m、面積990坪（約3,267㎡）の大きな邸宅である。表門は北向きで、城に向かう主要道の川毛通に面している。今回検出された石垣は屋敷の西側、八幡小路との境界に相当する場所である。石垣は一段しか残存していないが、本来は何段か存在していたものと思われる。残念ながら八幡小路の道路面は調査区外で検出できなかったが、石垣前方には溝があり、おそらく幅40cm以上の側溝が八幡小路両側に付随していたものと思われる。また、この石垣の方向が、北から約9°東に振れていた。八幡小路自体は、城内の北から城内を東西方向に延びる八丁小路を起点に、城内北東に位置する八幡宮まで続く道である。この八幡小路は、現存している城内の古図では、貞享元年（1684）前後に描かれた「三河吉田」のように直線路と描かれる場合と、天明7年（1787）に描かれた「三州吉田城図」ように川毛通で若干折れ曲がるように表現してあるものの2例が存在する。検出された小路が北より約9°東に振れていたということは、川毛通より北に延びる部分が約4°北から東に振れていると推定されることから考えると、やはり八幡小路自体は屈折していたものと考えられる。

藩士屋敷は、敷地を囲むように塀が巡らされていたようである。塀はSA-1～3の3列が見つかり、最低3回の建て替えが行われていた。このうちSA-1・2は石垣端より内側に1.5mの

同じ位置に重複して検出され、切り合い関係からSA-1の方が古いことが分かっている。SA-1・2とも方向はN-9°-Eであり、石垣と方向が一致していることから両者は一体のものであった。SA-1とSA-2は柱穴の間隔が異なることから、当初の塀は約1.5m間隔で柱が建てられていたが、後の建て替えにより約1.8m間隔で柱が建つように変更されている。これに対しSA-3は、方向がN-8°-Eと1°ではあるが角度が異なっており、石垣と時期が異なるものと思われる。また、塀の柱は約1.5m間隔で並んでいるが、2箇所柱穴がなく間隔が約3mの場所があり、この部分が門構造をなしていた可能性が考えられる。

さて、これら塀の帰属時期であるが、SA-1・2とSA-3の先後関係は不明である。SA-3・P3から19世紀前葉の陶器・仏飯器が出ており、SA-3の時期は19世紀前葉以降のものと考えられる。しかし、SA-1・2からは、明確な時期を示す遺物は出土していない。ところで、近世吉田城の形態を作ったのは池田照政である。天正18（1590）年に吉田城に入城した池田照政は、城の拡張を行い15万2千石にふさわしい大規模な縄張りを行った。城の中心からかなり離れた調査地が城内に含められたのは、この時の拡張時と考えられる。ただ、照政以降に入封した譜代大名は、城内の改修に着手しているが、石高が極めて低かったため大きな改修はなされず明治まで続いたとも言われている。吉田城藩士屋敷の描かれた正徳2・3（1712・13）年の古図には、八幡小路側には出入口がなく、川毛通に出入口が記載されている。この点を考慮すると、SA-1・2には出入口が無い点、同位置で建て替えられている点、石垣と方向が一致する点から前述した池田照政の吉田城拡張以降のものとして推測される。つまり、吉田城拡張当時はSA-1があり、その後SA-2に建て替えられ、18世紀後葉以降にSA-3に建て替えられた可能性が考えられるのである。特にSA-3に門が付随したと考えた場合、藩士屋敷は拡張当初は川毛通のみに出入口があったが、19世紀前葉以降に八幡小路側にも出入口が存在するようになったのではないかと考える。

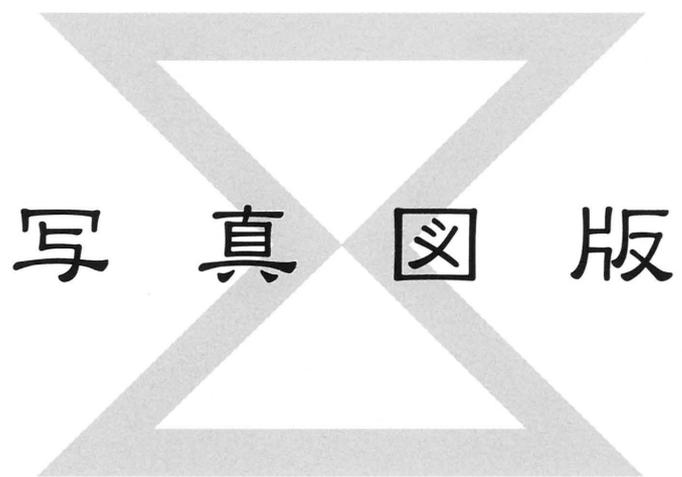
【吉田城廃城以後】

廃城以後のものには、遺構では城取り壊し時の廃材を捨てた廃棄土壙と歩兵第十八聯隊関係遺構があり、遺物では廃棄土壙内より出土した陶磁器、瓦、木製品、鉄器などがある。廃棄土壙（SK-6～9）は4基が連なって検出され、規模は長さ約11.5m以上、幅約2.5m以上を測る。過去の調査でも、このような廃棄土壙は本丸をはじめ各所に多数検出されている。この廃棄土壙からは、陶器類の日用品の他、釘やかすがい、敷居、瓦などの建物部材が出土しており、取り壊した屋敷の廃棄物を周囲に穴を掘って捨てた感があり、江戸時代後半の様相を知る上では貴重である。特に上級武士が嗜好した焼き塩壺が出土したことは、藩士屋敷の住人が上級職であったことを裏付けるものである。

歩兵第十八聯隊関連の遺構は、平面形や規模等は不明であるが、礎石下の根石が2箇所、石の混ざった溝状土壙が1基、土管が1箇所見つかっており、建物址と思われる。ただ、調査地は歩兵第十八聯隊の練兵場となった場所で、大正13年に撮影された写真では建物はなく単なる広場になっている。調査地は軍用地で機密性が高いため、検出された遺構は記録に残っていない建物と判断した。過去の調査では、軍隊関係の遺物が多数出土しているが、今回の調査では殆ど出土していない。これは、練兵場という広場である性格が大きいものと思われる。

報告書抄録

ふりがな	よしだじょうし(4)							
書名	吉田城址(Ⅳ)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	岩瀬彰利							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 豊橋市美術博物館 TEL 0532-51-2879							
発行年	西暦2000年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだじょうし 吉田城址	とよはしいまほしちょう 豊橋市今橋町 よんぱんちほか 4番地他	23201	79393	34° 46' 00"	137° 24' 00"	20000515~ 20000526	70㎡	豊橋市陸 上競技場 便所新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田城址	城館・ 集落	古代 中世 近世 近代	土壇 掘立柱建物・溝・ 土壇 石垣・堀・溝・ 土壇 建物	須恵器・灰釉陶器・ 土師器等 中世陶器・土師器等 陶磁器・土師器・鉄 製品・木製品等		幕末の中老、倉垣 源左衛門邸 出土磁器の85.71% は肥前		



写真図版

写真図版 1



1. 吉田城址上空写真



2. 歩兵第十八聯隊航空写真—大正13年撮影—（北から）



1. 吉田城址上本丸（北から）



2. 調査区遠景（北西から）

写真図版 3



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区全景（北から）



1. SA-1~3 (南から)



2. SA-1~3 (北から)

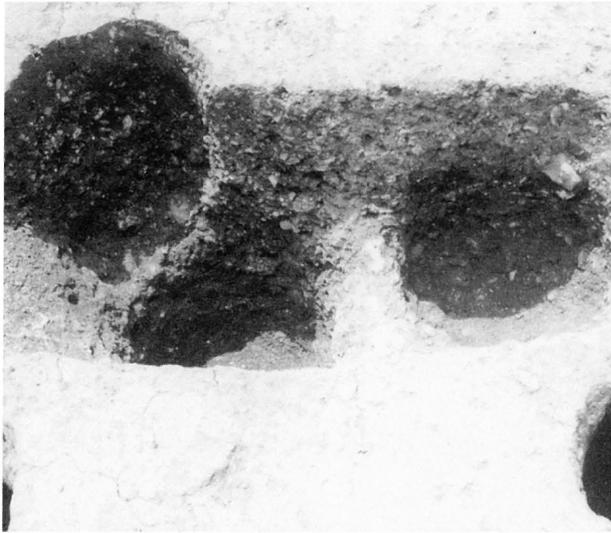


3. SA-1・2 P1 (西から)



4. SA-1・2 P2 (東から)

写真図版 5



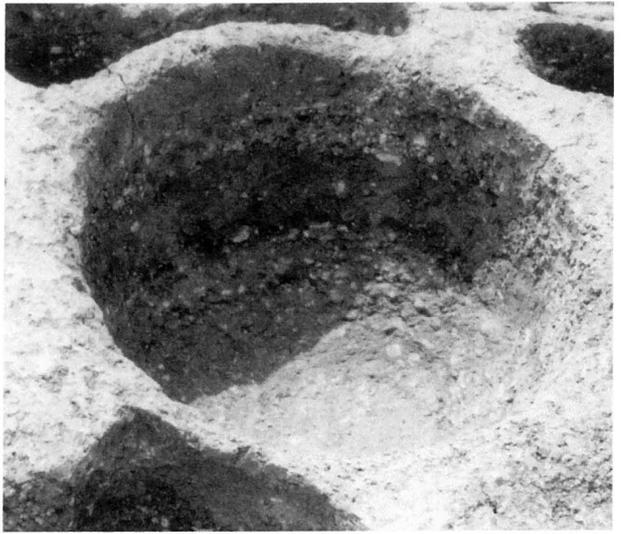
1. SA-1.2 P3 (東から)



2. SA-1.2 P9・P10 (東から)



3. SA-1 P10とSA-2 P9の切り合い (東から)



4. SK-4 (東から)



5. SB-1 (南から)



1. 石垣（北から）



2. 石垣（北から）



3. 石積みの様子（西から）



4. 石垣埋没状況（南から）

写真図版 7



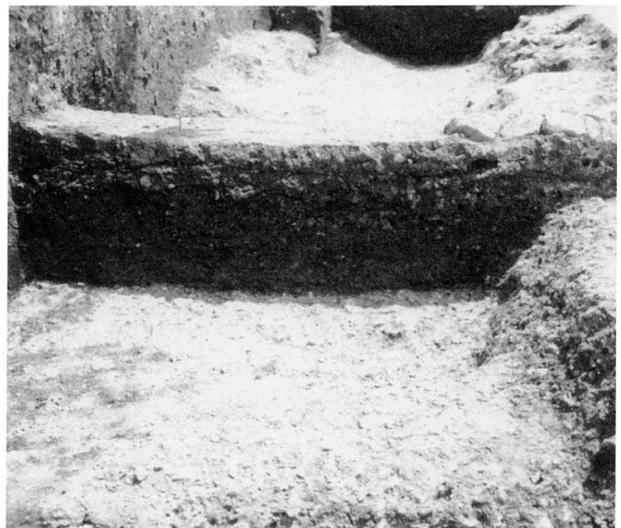
1. SK-6~9 (南から)



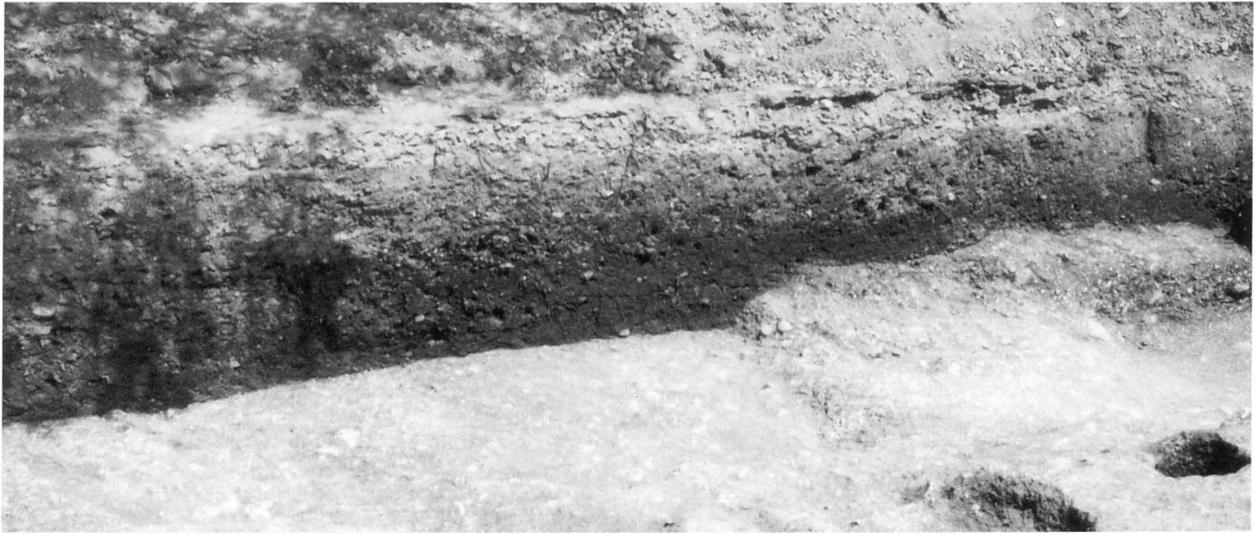
2. SK-6~9 (北から)



3. SK-6~9 A-A' ライン断面 (北から)



4. SK-6~9 B-B' ライン断面 (北から)



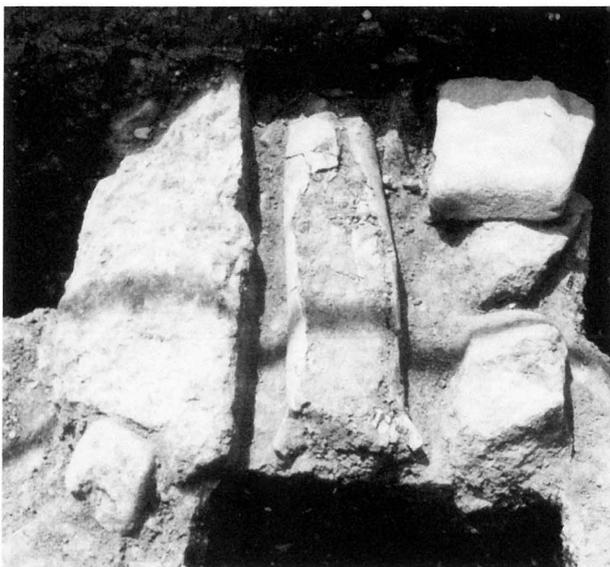
1. 調整区東壁断面（西から）



2. 歩兵第十八聯隊関連遺構-1（西から）



3. 歩兵第十八聯隊関連遺構-2（西から）

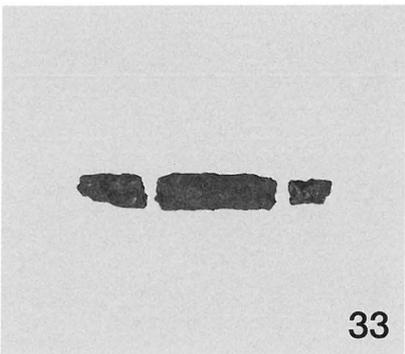
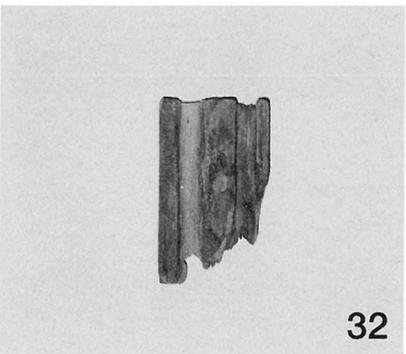
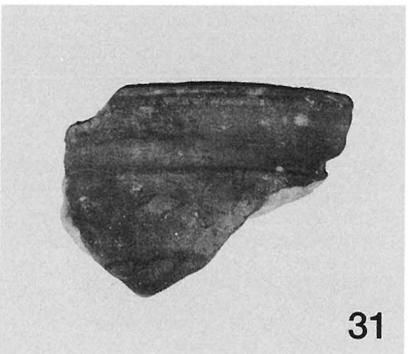
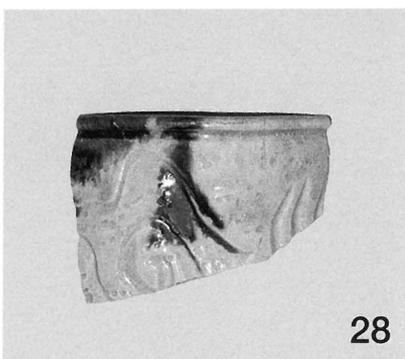
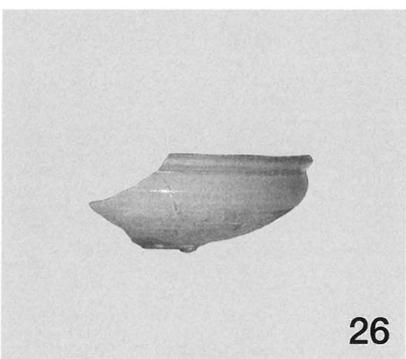
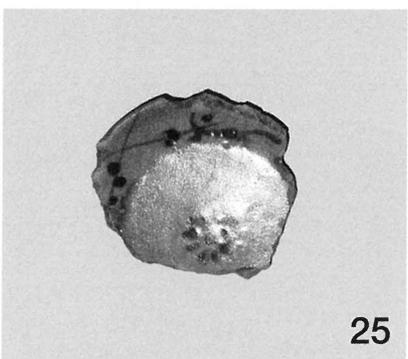
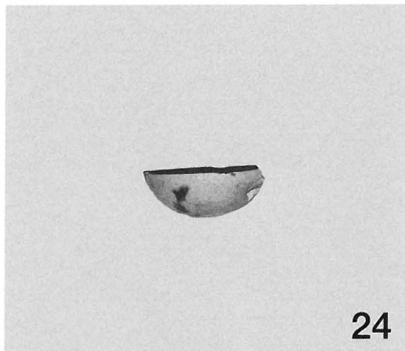
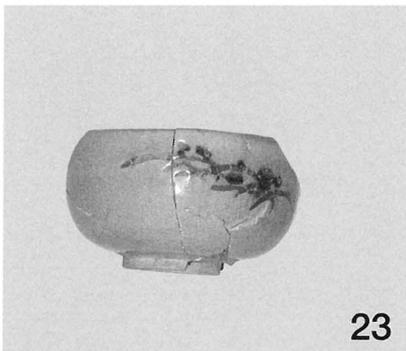
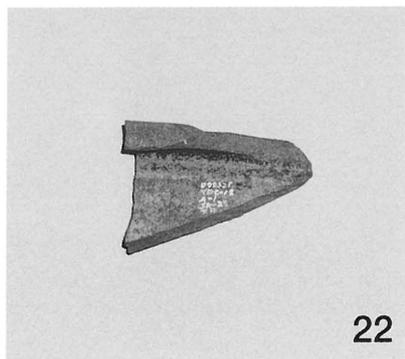
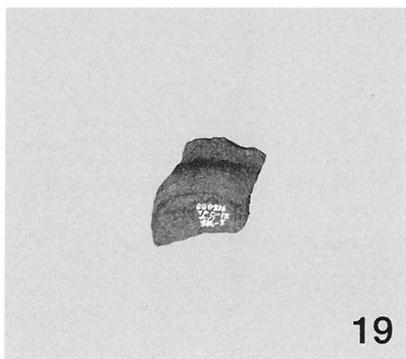
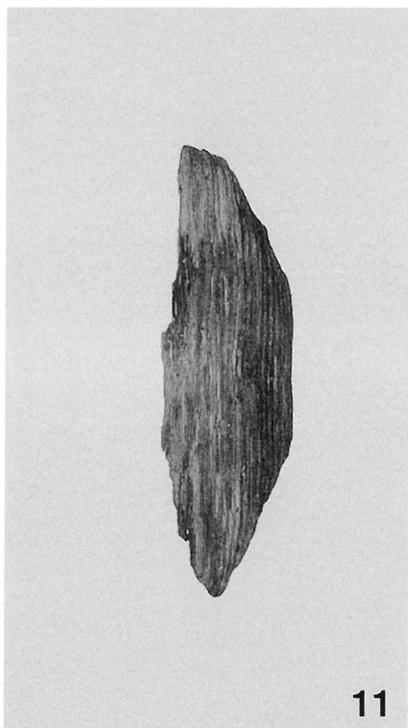
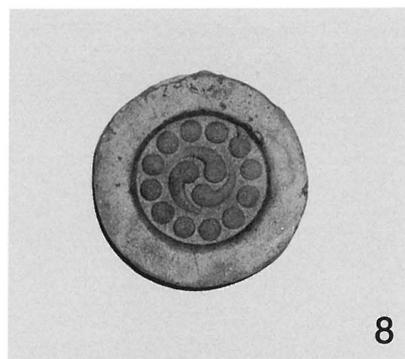
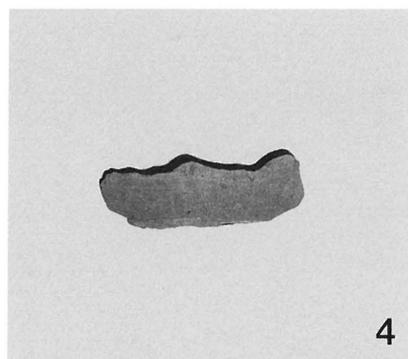


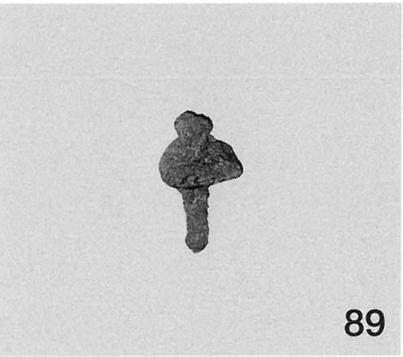
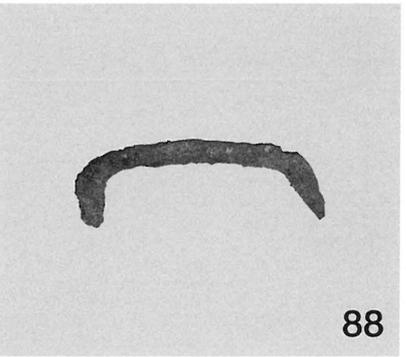
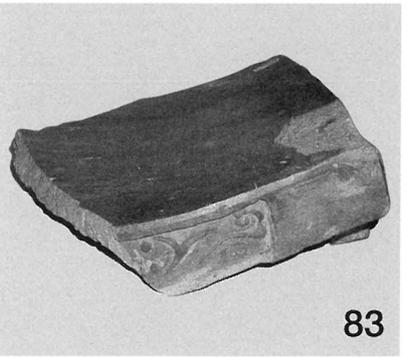
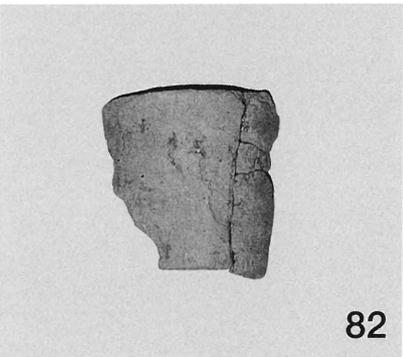
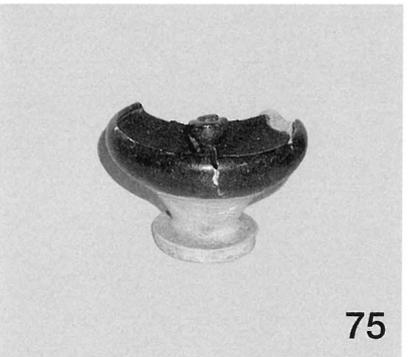
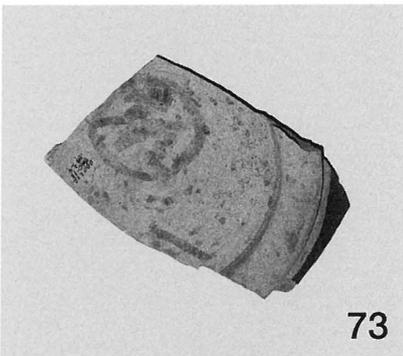
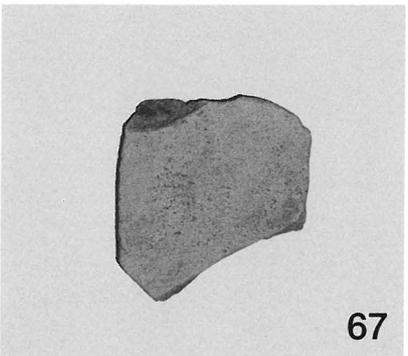
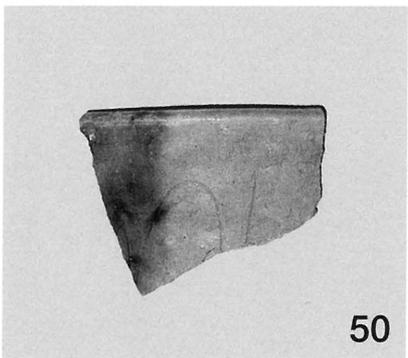
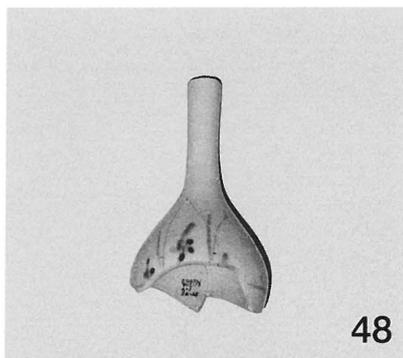
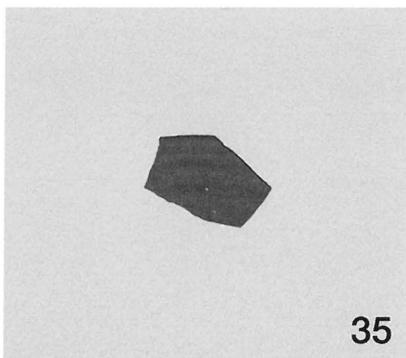
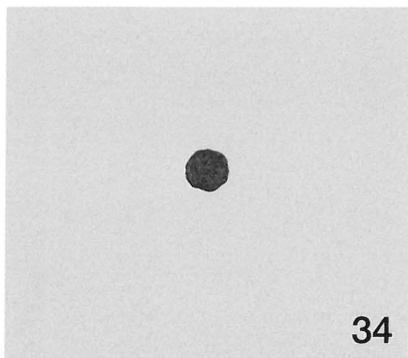
4. 歩兵第十八聯隊関連遺構-3（東から）



5. 調査の様子

写真図版 9





豊橋市埋蔵文化財調査報告書第55集

吉田城址(Ⅳ)

2000年12月28日

発行 豊橋市教育委員会©
教育部美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 共和印刷